569-176
1200501517782
569
176

291

書物は
大切に

絶版

下村海南著

落穗集

（六番茶）

博文館藏版

横山大觀畫

569-176

自序

舊著「新聞に入りて」に北海道樺太行の「三番茶」があり、次で伊豆紀行「四番茶」更に信濃路行「五番茶」は、いづれも時折々の紀行隨筆集を公けにするに當り、そのまゝ書目に冠するならはしとなつた。此筆法から推せばこのたびは「六番茶」と命名さるべきである。

靜岡で茶の道の玄人から聞くと、五番茶まではある、全くある、が六番茶はと首をかしげた。況んや七番茶八番茶に於てをや、もういゝ加減に出がらしになつた、この上六番茶でもあるまい。

昭和三年を中心として煙霞放浪せる中にも、朝鮮滿洲北支の行程は尤も長く、紀行百篇を越えたゞだら〳〵とつくるを知らず、牛涎集とでも題せんかと思ひしが、既に落穗集と名づけてある。そのまゝ、此書名に冠することにした。

今更前書に理窟をこねるは肩の凝る話なり、一と息ほつとして四番茶五番茶に喉をうるほされた方は、またこの落穗をつまんでくれる事なるべし。

昭和四年の初夏

海南識

目次

落穗集……一

第一編　釜山から蔚山へ……二

一　落穗拾ひ……二
二　釜山の一日……三
三　釜山の松島……六
四　松毛蟲……七
五　道廳移轉……九
六　東萊から釜山へ……一〇
七　ふさはしくない……一二
八　日月長し……一三
九　喧嘩と强盜……一四
十　姦通と墮胎……一五
十一　蔚山……一七

第二編　慶州より大邱へ……一九

十二　佛國寺……一九
十三　人形と石人……二一
十四　佛國寺ホテル……二二
十五　樹木折りとるべし……二三
十六　石佛庵……二四
十七　慶州の故蹟……二六
十八　新羅半月城……二九
十九　曹公碑……三〇
二十　大邱……三三
二十一　琵琶山……三五

第三編　扶餘郡山木浦……三七

二十二　恩津の彌勒佛……三七
二十三　百濟の舊都……三八
二十四　扶餘半月城……三八

二十五　百濟の讀み方……四二
二十六　敗れても史實……四三
二十七　江景より群山……四六
二十八　多木農場……四八
二十九　不二農場……五〇
三十　藤井寛太郎君……五三
三十一　干拓地……五四
三十二　富末光太郎君……五六
三十三　全南の木浦　上……五七
三十四　全南の木浦　下……五九
三十五　八口浦玉島の母子……六一

第四編　金剛山……六七

三十六　金剛山……六七
三十七　へそ……六九
三十八　長安寺……七〇
三十九　長安寺山門……七一
四十　佛の顏に泥……七二
四十一　正陽寺……七二
四十二　萬物相……七四
四十三　九龍淵……七六
四十四　知り過ぎる知らなさ過ぎる……七七

第五編　北鮮より間島へ……八〇

四十五　行樂鄕元山……八〇
四十六　元山……八二
四十七　成鏡線……八四
四十八　七十萬キロ……八五
四十九　脚戲……八八
五十　ぶらんこ……九〇
五十一　國境氣分……九一
五十二　間島入り……九三
五十三　間島夜話……九五
五十四　白日旗と弔旗……九七

五十五　局子街と龍井村……九九
五十六　馬賊夜話……一〇〇
五十七　下岡三峰……一〇三
五十八　下汝坪……一〇六
五十九　三國一目……一〇七
六十　東萊と朱乙……一〇九
六十一　松竹梅……一一一

第六編　開城鎭南浦平壤……一一五

六十二　白衣……一一五
六十三　朝鮮雅樂……一一七
六十四　開城……一一八
六十五　人蔘の見目かたち……一二〇
六十六　太祖の陵……一二二
六十七　鄭夢周……一二三
六十八　滿月臺……一二五
六十九　兼二浦……一二六
七十　大同江……一二八
七十一　鎭南浦……一三〇
七十二　西崎君の御辨當……一三二
七十三　鯛のあらい……一三四
七十四　三和花園……一三五
七十五　平壤……一三六
七十六　お牧の茶屋……一三八
七十七　統軍亭……一三九
七十八　義州と安東……一四一

第七編　朝鮮語問題……一四四

七十九　肥料と糟……一四四
八十　教誨師身の上知らず……一四五
八十一　支那語と朝鮮語……一四六
八十二　支那語要不要……一四八
八十三　遠い親類近い他人……一五〇
八十四　行き屆いた教育……一五二

八十五　朝鮮語練習……一五三
八十六　日本語普及のため？……一五四
八十七　愛蘭問題……一五六
八十八　愛蘭語……一五九
八十九　融和問題と語……一六〇
九十　エスペラント……一六一
九十一　鮮人か朝鮮人か……一六三
九十二　御健康を！……一六四
九十三　諸鹿央雄　國本綱一……一六四
九十四　悲劇（加藤灌覺）……一六六
九十五　窪田誠惠……一六七
九十六　獨佛共學……一六八
九十七　詞の交換　血の交換……一六九

第八編　移民問題……一七一

九十八　朝鮮人と内地移入……一七一
九十九　山東移民……一七三
百　支那人進出……一七四
百一　日本・朝鮮・支那……一七五
百二　内地人ベタ負け……一七七
百三　朝鮮移入？内地移入？……一七八
百四　朝鮮人夫……一八〇
百五　幸田たま子女史……一八二
百六　白善行女史……一八三
百七　金秉眞夫人……一八四
百八　土屋商工學校長……一八五
百九　昭和館……一八七

第九編　朝鮮雜觀……一九〇

百十　筆硯更新……一九〇
百十一　御大禮と新領土……一九二
百十二　トロ敷設……一九三
百十三　トロの衝突……一九四
百十四　搔きむしろ……一九六

百十五　朝鮮と四國……一九八
百十六　失職と結婚……二〇〇
百十七　職を生かしめよ……二〇二
百十八　二二が四……二〇四
百十九　故郷忘じがたし……二〇五
百二十　郷を同じくする人……二〇七
百二十一　同窓の友……二〇八
百二十二　遞信畑臺灣畑……二一〇
百二十三　師弟の思ひ出……二一一
百二十四　佐藤眞珠王……二一三
百二十五　韓邸の一夜……二一五
百二十六　終りに臨み……二一七

第十編　滿洲より北平濟南へ……二二〇

百二十七　奉天……二二〇
百二十八　大連と旅順……二二二
百二十九　大連旅順の歌……二二四
百三十　義和團事變……二二五
百三十一　宣統帝の假の宿……二二七
百三十二　ポスターの北平……二二九
百三十三　香山碧雲寺……二三二
百三十四　通行料……二三五
百三十五　北京の觀象臺……二三九
百三十六　北平行吟……二四四
百三十七　生々しき戰跡……二四六
百三十八　宣傳下手？濟南事件……二四九
百三十九　濟南行吟……二五一
百四十　山東問題……二五二
百四十一　日光丸六勇士の遺骨……二五八

空の旅エピソード……二六一

一　飛行機安不安……二六一
二　一家もろとも……二六二
三　優曇華の花……二六四

四　築港の五重の塔……二六六
五　更科そばと大阪ずし……二六八
六　鈴鹿越えず……二六九
七　近江八景一と目……二七〇
八　搖れる搖れぬ醉ふ醉はぬ……二七二
九　超高速度短歌……二七三

雅邦と春草と大觀……二七七
一　雅邦の龍虎　二　春草の落葉
三　大觀の瀟湘八景　四　美術館

正雲寺の一丈塚……二八九

石見のや……二九三
一　孤獨の樂み　二　石州津和野
三　お客とボーイの根氣くらべ
四　驛名と旅客難

山陰の溫泉場……三〇三

海を渡りて野をわたりて……三〇七
（牧野英一博士の近著を讀む）

百穗君の『寒竹』……三一二

庄亮君の『草原』……三一七

腹と腰……三二四

聖堂の一日……三三一
上、大成殿の今昔　中、正位四配の陳說
下、永野練太郎と山崎闇齋

朝鮮のキヤデー、支那のキヤデー……三四六

支那のキヤーデキー……三五〇

勘定の動物……三五〇

滿鮮のゴルフ……三五一

二十四ケ處のクラブ疵……三五二

高くて球らぬ、球……三五四

バッグの爭奪戰……三五五

重ねぐ〜の御難……三五六
スリカヘ球……三五七

通し球……三五八

球取物語……三五九

チーの拾ひ賃……三六一

泣き賃請求……三六二

沒法子……三六三

旅の者……三六五

乃木寺とゴルフ……三六七
一　乃木寺へ御寄附……三六七
二　紐育のバブリツク・リンク……三七二
三　かきたいといふ皮膚病……三七七
四　聽講料の代りに聞かせ賃……三八二
五　乃木寺の正體……三八五

子の恩……三八八
上、蓮華草　中、子を持つ有難味
下、子の恩國の恩

小山内君の名を借りて……三九九
上　御大老と近松と山陽……三九九
下　昭和三年の日本の七の大きな出來事……四〇四

梅田ステーション……四〇八
上　奥の奥にかくれた電報受付口……四〇八
下　驛長兼郵便局長……四一二

坐禪帶と楚人冠……四一四
上　坐禪帶念入り僞造……四一四
下　楚人冠物故……四一六
にきび野郎……四二〇
上　お伊勢參り……四二〇
下　熱海から箱根へ……四二三
死花物語……四二六
或る一家心中……四三二

目次終り

落穂集

昭和三年六月下旬杉村楚人冠と手を携へて朝鮮に向ふ。

釜山に上陸してから自動車で東萊蔚山を經て佛國寺に至り石窟庵に詣で慶州の遺蹟をたづね大邱に入る。

大邱より鐵路太田に至り、湖南線に分れて百濟の舊都扶餘を吊ひ、江景群山木浦より八口浦に遊ぶ。

京城より北鮮に入るの途、鐵原より分かれて內金剛外金剛の勝を探り、海路元山にいで更らに北上し、咸興羅南を經て豆滿江畔會寧にいたる。

江を渡りて間島の龍井村にいたり、再び江南にかへり更に慶源より三度江に棹して琿春を訪ふ。

琿春より四度江をわたりて慶興に入り、江をへだてゝポシエット灣を望む、道をかへして雄基嶺を越え雄基港に出で、陸路羅津を往復し海路淸津にいたる。

南下再び京城に入り更に北上の途に上り、開城に高麗の古都をしのび、兼二浦より大同

江に棹して鎭南浦に下り、平壤への途次江西樂浪の古墳をたづね、鐵路新義州に入り更に義州統軍亭に登り、鴨綠江を舟により安東縣に下りて滿洲に向ふ。

奉天に張學良將軍と會見し、旅順大連の間に逍遙し、渤海を横ぎり白河を遡り、天津に遊びて宣統帝段祺瑞將軍を訪ひ、北京の城の内城の外萬壽山西山八方山の勝をさぐり、道をかへし天津より海路青島に上陸し生々しき戰場のあとを濟南に吊ふ。

此間二ヶ月の客路楚人冠と交々筆を大阪朝日の紙上にのせ、更らに楚人冠は神仙爐三十餘篇を朝鮮朝日に連載し、予も亦落穂集百餘篇を續載した。

今その凡てをあつめ更らに之れを遍路の順序に組み直し、その重複せるはさけ缺けたるは補ひ、楚君の筆になれるものを交へてこゝに十篇百四十餘節を得た。

もとより色とりどりである、混食奬勵の世の中である、之れがまさしく落穂の落穂たる所以であらう。

第一編　釜山から蔚山へ

一、落穂拾ひ

同じ時に同じところを同じ新聞社に同じく筆をとる者が手をひいて旅をした、その紀行文がその旅をともにした楚人冠の筆により神仙爐の名のもとにすでに幾何十回となく載せられてある。

そのあとからまたもやのこ〳〵と同じ旅の思ひ出を書くといふのだからまあ落穂集とでも題しておかう。

見方書き方がちがふにしても同じ旅日記である。どうせ重複もしやう、くどくもならう、ことに在鮮の人よりも内地の人にいふて見たい氣持がかつてるから、見る人の多くにはそれは間ちがつてるとか、そんなことは分り切つてゐるよとかいふやうな感じを與へる事も少くないであらう。

お米ばかりか、麥も稗もあるところに落穂らしいところがあるのだから。

二、釜山の一日

楚人冠

釜山に船の着いたのは朝の八時ごろであつた。昨夜はよいなぎであつた。

龍頭山といふのに登る。あへて象頭山の向ふを張つたわけでもあるまいが、兎に角こゝには二百五十年前から金毘羅さまが祭られてある。船の便利の悪いころにこゝへ移つて來た日本人が、船路の安否を氣づかつて、何よりも先に金毘羅さまを祭つたのを見て、その時代の精神がしのばれる。

この高臺から四方を見まはすと、高い山の中腹に點々と家が立つてゐる。朝鮮人の住居だといふ。朝鮮人は氣の利いたことをするものかなと思つたら、案内に立つた人が笑つて、この邊の朝鮮人は次第に市中に住みにくゝなつて、山手へ〳〵と移つて行くのはいゝが、移つて行く時、土地の私有權とか何とかいふ小面倒なことに頓着しない彼等は、他人の所有地であらうが、公有地であらうが、遠慮も何もせず、勝手なところへ家を建てゝ了ふ、のんきなものだよといふことであつた。なるほど土地の所有權なんぞに頓着しないといふは朝鮮らしくていゝ。内地では思ひも及ばぬことゝ思つた。

小西行長の城跡といふのに登る。本丸の跡ははるかな山の上に石垣を殘して、こゝはそれから谷間一つを隔てたところにある。山城だつたさうな。その谷間には今家々が立ち列んで、この山城も朝鮮人の家に圍まれてある。行長も此處では朝鮮軍に圍まれて大分苦戰をしたものらしい。石垣の側の廣場に立つて、當時を思ひやると、一種の感慨に打たれる。

城跡の直ぐ下に今日朝鮮人の市日とて、白衣の人々が三四町の細い道路をぎつしりと埋めてゐる。それが右往左往に入り亂れてざは〳〵とざはつく昔の聞えて來るところはゴールドスミスの「寒村行」の文句を思ひ出させる。

松島といふところに案内される。海水浴場として經營されたのだがあまり客足がつかぬので追々にさびれたとかで、空家になつた旅館があちこちに立つてゐる。如何さま海水浴場にはよささうな。眼下に釜山灣を見下してはるかに長汀曲浦の趣またなくのびやかなるを見る。旗亭竹屋といふに入つて迫間房次郎氏から午餐の饗をうけた。

夕方知事、府尹、商議會頭等の發起になる歡迎會に列した後、夜公會堂の講演を終つて、釜山郊外の東萊溫泉に車を飛ばす。月明かに風涼し。溫泉に入つてから、くつろいで夜食の膳に向ふ。海南先生いまだ講演から歸らず。（六月一日東萊溫泉にて）

三、釜山の松島

釜山の町を海添ひに西にぬけると松島といふところがある。絶影島こと牧の島が前に横つてる、その右手に對州が霞んでるはずだが今日は曇つて見えない。

この絶景を前にした山角に料理店が散らかつてるが庭先の小松はどの枝もどの葉先も松毛蟲につきまとはれてる、松だけでは喰ひ足りないか、松毛蟲の有志が緣先や鴨居の邊にまであちこちと漫遊をこゝろみてる。

こゝの家で養殖してゐない證據には緣側を通る女中衆が毛蟲を見るとアラ嫌だなど

外金剛九龍淵

と後ずさりする。土地の人々が歡賞しない證據には、それ毛蟲がといふとお酌はもとより四十づらさげた大年増まであれえ！　と金切聲をあげる。

して見ると朝から晩までお客がたて込んでるわけではなし、あい間〳〵には自分達のため、お客さんのため、またあの小松のため、せめて手近な松毛蟲位はとつた方が宜しいかのやうにおもはれます。

四、松毛蟲

迫間君は牧の島に何十町歩かの土地を持つてる、赤禿げた島が綠色に色どられたのは君が松を植たからださうだが、松毛蟲につかれたため、年々松毛蟲退治をこゝろみて、一と桝四錢か五錢かで何百石とかとれるといふ。

京城郊外清涼里のゴルフリンクにも、どの松もどの松も松毛蟲にとつゝかれてる、ゴルフの名人ならざる筆者などは球を松林の中にたゝき込んでは、いつも松毛蟲の小枝

に頬をなでられる、どうも感心しない。

十三番のグリーンから十四番のチーへゆく途中には、可愛い五尺に足らぬ若松がならんでる、それがまた克明に毛蟲につかれてる、いつもこの道を通るときは何匹かふり落してはふみ殺すことにきめたが、とてもやり切れないからとう〳〵毛蟲退治論を提出する、前にもやつたことがあるといふので御採用になる、聞けば十何石とかとれたといふ。

松毛蟲は樺太の山林を立枯れにして今や北海道の西北端に侵入しつゝある、なんでも燈臺の光りを慕うて蛾の時分に宗谷へむけ飛んでゆくのだとか、船の往復が多くなつたから混雜に紛れて密航するのだとかいろ〳〵に傳へられてる。

いづれにしても中々退治にくい、といふてほつておくとどこまでもひろがつて行くこの毛蟲はインヂゴ代りの染料にもならず、さりとて肥料にもなりさうにないから公平に分配も出來ない、しかし一匹殺せば一匹だけ減る、赤禿亡國の弊にかんがみ、植

物愛護の志を以つて、まあ各々が手あたり次第退治るにかぎる。

五、道廳移轉

内地で今新に縣廳を置くとすれば福島より郡山、浦和より大宮、山口より下關か防府邊におくといふ說が可なり有力であらう、が移轉となると中々事面倒となる。

朝鮮にも同じやうなところが多いやうである、何よりも京城に次での釜山に道廳がなかつた、誰か晉州といふところにあるなどゝ知つてをらうぞ。

朝鮮でも道廳設置の當初に百年の長計を考へて置くべきであつた、それだけに道廳を釜山に移したことは英斷といはねばならない。

釜山の町中に小高い丘があり、そこに金毘羅さんが祀られてある、この丘が公園となつて自動車で頂上まで乘りつけることができる、案内の人はこれが小西君の置土產でしたといふ。

その小西君が釜山府尹の時に道廳も移轉せられた、その小西君は今江原道の内務部長に轉任してゐる、金剛山長安寺ホテルの茶卓で道廳移轉の話に花が咲くと、小西君は當地に轉任した時も江原道廳を春川から鐵道沿線の鐵原へとの移轉論があるので、また小西はやりやしないかと騒がれまして大きに弱りましたよと、あんまり弱りもしないやうな顔付でいふ。

小西恭介君は臺灣における僕の舊友である。

六、東萊から釜山へ

楚人冠

朝東萊溫泉を發して自動車行十三里、蔚山に向ふ。風強し。

この邊の山々はその頂きの腹にとつこつたる岩石を露はしこれに近ごろ植つけたらしい小松がかぶさつて、さながら盆景に似たり。さうかと思ふと、青々した若木の間から燃ゆるが如き赤土を見せたのがある。をちこちに羽の白いからすが飛び交ひ、白

衣の鮮人がちらほらと往來す。宛として南畫の如し。

沿道目のとゞく限り耕さゞるはなし。道の邊にはやたらにポプラーとアカシアを植ゑてある。つまらぬ樹を無暗に植ゑたるものと思ふ。ところ〴〵に朝鮮家屋の低い屋根が見える。蔚山に至るまで十三里の間一人の内地人を見ず。

蔚山に至りて有志の出迎へを受け鶴城館といふに入りて一同より午餐の饗を受く。食後加藤清正が淺野幸長と共に籠城したので名高い蔚山城の跡を見る。僅か十餘日の籠城に水に窮して馬の血をすゝつたといふもことわり、この城は平野の中に立つた離れ山で如何にも水の手が惡かつたらしい。本丸跡から東を眺むれば一面に麥の黄ばんだ畠が續いて、この間帶のやうな大和江が貫き流れ、遠く蔚山灣の入りこんだところが見える。清正のころはこの畠が海であつて、船がひた〳〵と城の下に着いたのだといふ。船着場の跡が今に殘つてゐる。西の方眼下に兵營村を見る。當年朝鮮軍の兵營を構へてこの城に臨めるところといふ。郡守孫永穆、警察署長小島孝及び水利組合理

事口石敬義諸氏の説明詳密を極めた。

七、ふさはしくない

白衣は清楚である、上品である、それだけにざるや水がめを頭にのせてゆく婦人の白衣はふさはしくない、それだけに泥田にぬかるんでる田夫の白衣はふさはしくない、「ちげ」に枯れ松の枝をしこたま積み上げ、及び腰で負うてゆく形もふさはしくない。

その田夫なり擔夫が八字の天神ひげに腮ひげまで生やしてある、ます〳〵もつてふさはしくない。

冠着けひげ長くのびし鮮人の
枯松の枝負ひて市にいづる見ゆ

八、日月長し

釜山から京城、新義州とたゞ汽車でぶつ通したゞけで朝鮮をかれこれいはれるのは困るといふ、汽車のぶつ通しでもよろしい、全く知らないよりは結構だが、また汽車だけで一知半解の言を弄せられるのも困ることは困るに相違ない。

今日は釜山郊外の東萊溫泉から慶州の佛國寺まで終日山を越え野を渡り自動車をはしらす、心ゆくまで田舍の村々の情調が味はへる。

わづかに十軒二十軒と部落をなしたところには必らず旅館の看板がかゝつてる、といふてそんなに旅客が來往してるかといへば左にあらず、行人稀に坦々たる一路平安に連らなつてる、といふてそれでは旅館は立つてゆきますまいといへば、看板だけが旅館で實は彼の臺灣紅頭嶼のヤミ蕃人の蕃屋にさも似たり、まづ内地の木賃宿と見れば、あるは戸外に樹の蔭に、長煙管を手にし相圍みて世間話でもしてゐるのであらうに、よろしい、あとは雜貨店に飲食店位、そこにもこゝにも白衣の人々は狹苦しい屋内悠々閑々として日月長しの觀がある。

任那より新羅に越ゆる山の峽
ゆく人あらず前にもあとにも

九、喧嘩と强盗

喧嘩といふ字義は、口八釜しい口に花が咲くといふ意味にはとれるが、斬る突く、なぐる、どやすといふ意味がないやうである。

朝鮮人の喧嘩は全く手は振りあげても振りあげたまゝである、顔をすりよせ眼尻を釣り上げ口角泡を飛ばすが、たゞ泡を飛ばすだけで中々手でなぐりつけもしない、足でけし飛ばしもしない、所謂喧嘩の喧嘩たる所以であるといふ。

一月餘の朝鮮旅行中、喧嘩の字義の講釋もしてもらうたが、ところ〴〵で所謂喧嘩から一歩すゝめた手足の直接行動を見ないでもなかつた、ところで警察の筋の人に聞くと、朝鮮では泥棒となると窃盗より强盗が多いといふ。

口先の喧嘩に花を咲かす朝鮮人に强盗の多いのは不思議だといへば、强盗をしたいのではない、已むを得ず强盗になるのだといふ、なんで已むを得ず强盗になるのかと言へば、朝鮮人の家屋は低い小さい狹い、窃盗をしたくも窃盗になりやうがない、間數は少なくて人間が一杯になつて寢てる、どうしてもこつそりとかつぱらうわけにはいかない、ことに朝鮮人は巾着を肌につけて寢るから、家財の少ない朝鮮人家屋ではいつも强盗になりたがる、いや强盗にならざるを得ないといふ。

十、姦通と墮胎

これに似た話は朝鮮の婦人に姦通が多い、墮胎、嬰兒殺しが多いといふことである、婦人の節操が輕いのかといふといやどうして重すぎるからだといふ。

なんで節操觀念が重すぎると姦通が多いかといふと、朝鮮では男子は十歳前後から女子を娶る、女子はいつも三、四歳年長者たるを原則とする、第一に女子は子供のや

うな夫によりて滿足を得にくい、第二に少しく年を經ると夫は血氣盛んになるが婦人の容色は衰へてくる。

衰へぬまでも夫は他に情を移しやすい、第三には何よりも夫が死亡すればどんなに若くとも絶對に後家を通さねばならぬ、かうした運命に弄される婦人として姦通の多いに不思議はない、世間への體裁に墮胎、嬰兒殺しを餘儀なくされるはもつとも千萬である。

今や朝鮮の婦人は極端な女今川式の枷の中から解放されつゝある、離婚も認められてくる、若い後家さんも少なくなるらしい、しかし朝鮮人の經濟的地位が高まつて、間數の多い、少なくとも內地なみの家に住むやうには、かなりの歲月を經ることであらう、一口に朝鮮に强盜と姦通が多いといふてもそこには裏の裏がある、世の中のことはやゝこしい。早合點ができない。（これは七月十三日天津アストル、ハウスで起草し內地の公民講座の誌上によせた小品である）

十一、蔚山

蔚山！　子供の時から耳馴染になつてる蔚山は、案にたがうてちつぽけな山？　いや丘といふ方が當つてる、それも麥田の中にぽつんと立つてる丘である、高嶺を脊負うてる山地の要害のやうな豫想を抱いてゐたら、入江に臨んだ小さな離れ丘である、先づ廣島縣廿日市の桂公園、その昔桂太郎大將の祖元澄が、陶晴賢の軍と戰うたあの橫尾の城趾と相似てる、なるほどこれでは水の手にも困る兵糧にも窮する、馬の血をすゝつた位は愚かなことである。

一體古戰場といふものはウオータールーでも關が原でも、さて實地に臨むとまことにあつさりしたものである、蔚山またしかり、たゞそれが街から遠からぬところに公園となり、大和の人、任那、新羅の人、百濟、高麗の人達の行樂の地となつてる、今昔の感多少。

一めんに熟れ黄ばみたる麥畑を
　ながるゝ水のはろ〳〵しかも
蔚山は公園となりて山の上に
　いま語らへり大和人高麗人

第二編　慶州より大邱へ

十二、佛國寺

楚人冠

蔚山を發して後五里餘、このあたりに多い王陵中の最大前古と稱する掛陵を拜す。ぽつさりと茂つた松の影に大きな土饅頭が毛氈を敷いたやうな青草の上に立つてある。如何にもおちついた感じのする御陵である。たれの陵とも分らず、新羅三十世の王文武王のといふ立石は信ずるに足らずといふ。兩側に立つた人獸の石像、陵のまはりに彫つた十二支像、いづれも簡素にして雄勁を極めてゐる。これまで出迎へられた郡守馬場是一郎、諸鹿央雄の兩氏具さに說明の勞をとらる。馬場郡守は海南博士の四十年前の同窓で、四十年ぶりで偶然こゝに再會したるものといふ。海南もまた古いものである。

車行三、四里にして佛國寺に着し、諸鹿氏の案内で二十六丁の山道を登つて、やか

ましい石窟庵に詣でる。諸鹿君朝鮮に在ること二十餘年、朝鮮語をあやつること日本語に異ならず朝鮮の史實と史蹟を語るに掌中の物を探るが如し。知らずといふことなし。全く大變な人である。石窟庵の佛像についても語ること深く且くはし。あの佛像のいづれはあれどわけてめでたきは中央の本尊釋迦牟尼佛で、胸から兩腕にかけて豐麗な肉つきさながら指で押へたら肉が凹みさうな。石佛とも覺えず。佛らしい神々しさはどうかと思ふが、秀麗の美を極めてゐることは、如何さま世にやかましく傳へらるゝだけのことある。晶子女史が「美男におはす」といはれた鎌倉の大佛なんぞ遠く足もとにも及ばず。

日暮れなんとするころ山を下りて佛國寺に詣でその前の佛國寺旅館に投ず。一望に慶尙南道の山野を見はるかし山氣人に迫りて夏已に至れるを覺えず。今夜は定めていを安くこそねめ。（六月二日夜佛國寺にて）

十三、人形と石人

慶州の故趾を吊うても金剛山の寺々に參詣しても、そこに地藏さんとか石佛めいたものは見當らない、慶州の武烈王の子文武王の陵と傳へられてる掛陵には、十二支神像の護石が陽刻されてあり、その前方には石獅子二對文武石人各一對相對峙してある、いづれも半ば土に埋もれたのが周圍に掘り下げられてある、その文武人の鼻は缺け手足のもぎ折られたるがある。

ある物識りの曰く、朝鮮人はさうしたものを怪物視する、こはい、恐ろしい、魔物のやうな感じをする、だから鼻を缺く手足を折る、何より證據には朝鮮にはおもちやの人形がないといふ。

石人の足折れたるは折れしまゝに
もだし立てるも我を仰ぎて

十四、佛國寺ホテル

慶州の佛國寺はその登り口が花崗岩の階段により虹形の橋をなし高く築き上げられ、門に入りては同じく花崗岩の多寶塔と釋迦塔いづれも新羅時代の傑作として推稱せられてる。

佛國寺の前を一町足らずにして佛國寺ホテルがある、名はホテルといへるも日本屋で、軍人にいはすと獨立家屋である、奥州蔦の溫泉の雅趣はその一つ家なるにあり、佛國寺ホテルもまさしく閑寂そのものである、緣先に出るとはろ〳〵とうねりうねつた丘陵や田野をへだてゝ赤く青く紫に三重にも四重に山脈が疊々相重なりてはしつてる、この雄大な景色の中に煙突も見えぬ、汽車の煙もない、赤煉瓦もない、白壁もない、工場もない、凡てのものがたゞ靜けさである、自然のまゝである、庭前又一草一木なし、點ずるに五六の岩あり、そのそばに芍藥の幾株かゞ花片ややにくづれて地に印せるが見えるのみである。

佛國寺小雨の朝を芍藥の
　花やゝくづれ靜かなるかも
なみよろふ赤き山青き山ほの匂ひ
　新羅の國の夜は明けんとす

十五、樹木折りとるべし

朝鮮人には植物の愛護心なし、かるが故にどの山もどの山も赤禿になつてるといふ、木や枝はおろか草の根まで「おんどる」の燃料に入用なのだといふ。

佛國寺から石佛庵に詣づべく吐含峰の山道二十八町を登つてゆくと、ところ〳〵に道しるべの札と櫻の若木らしいのが、極めて不規則にちらほらではない、思ひ出したやうに目につく、諸鹿君曰く、何十となく建てた木札はこの通り大概とられて仕舞ひました、何よりも櫻の苗木を何百本となく植付けたが、九分九厘まで折られる、拔か

れる、これには全く泣きたくなりましたといふ、又燃料にかね、と詞をかへすと、いいやこれはある高等普通學校の生徒が團體登山の時、いたづら半分にやつたのですといふ、その學校では樹木は手あたり次第折りとるべしとは敎へなかつたらしい。

十六、石佛庵

朝鮮の人に佛國寺の石佛を說くは、なほ內地の人に奈良の大佛を口にするが如しといふほどでもあるまいが、近ごろ朝鮮でも古寺史蹟などの保存に意を用ひ、この石窟庵も大枚の金を投じ前後十餘年間を費し修理せられたとある。

佛國寺の吐含峰を登りつめて、裏側に少しく下ると山の斜面を横に穿つた花崗岩の窟がある、直徑二丈にあまり中央に一丈一尺の一枚岩の釋迦の坐像が安置せられ、この大釋迦像を圓く圍みて十一面觀音十體の羅漢像、文珠、普賢、觀音、勢至の諸菩薩等十五體の等身の立像、その上部龕には八體の菩薩の坐像いづれも薄肉彫に刻まれてある。

優美、崇嚴、端正、慈悲の靈感にみちた石佛は、まさしく入神の妙技として東洋屈指の傑作と嘆稱せられてゐる。

それが李朝の廢佛毀釋により長く荊棘のうちに埋もれ、その存在すら世間から忘れられ、石窟も崩壞のまゝに委せられてゐたのが、今は內地人はもとより朝鮮人も、なるほどそんなに珍重すべきものかいなと、ぞろ〳〵と登山參拜者が踵をつぐ、石窟の前には寫眞屋まで出來て記念撮影といふ段取にまでなつて來た。

ところでこの石窟の十五體の等身の立像は、ところ〳〵青ずんで來てる。諸鹿君の說明によると、修理の時に天井の上は一面にコンクリートにしたため、この洞窟にこもつた濃霧のぬけ道がすつかり塞がれてしまひ、霧凝つて露となり、佛身に青苔を生ずるに至つたのだといふ。

コンクリートのために霧凝つて露となる、昔からいうてる、凝つては思案に能はず。

十七、慶州の故蹟

楚人冠

國破れて山河あり。古代朝鮮の最盛期たる新羅朝一千年の榮華は、その後高麗朝の五百年、李朝の五百年を經て、一千年後の今日、僅にこの慶州に跡をとゞめた。三韓三國の兩時代のいづれはあれど、今にその遺跡の傳へられたのはほとんどこの新羅の慶州あるのみ。この點においても慶州は珍とするに足りる。

馬場郡守と例の諸鹿君との案内で海南博士と共に朝からこの遺跡を見てまはる。王陵二三に詣して後四天王寺の跡を右に見ながら芬皇寺の三層塔を拜し雁鴨池に至る、今から千二百年前にはこの池の周圍に金殿玉樓の數々を築き、その間に廻廊をめぐらし、山を造り橋を架した宮苑があつたが、樓閣は臨海殿址の外殘りなく消えてたゞ池だけが殘つてゐる。池の堤上には鮮人が治亂興亡の跡も知らぬげに鮒を釣つてゐた。

瞻星臺とて天文觀測用の建物としてはアジア中で最も古いものだといふ高さ三丈ばかりの石造の圓筒を左に見て半月城の跡に行く。新羅の武内宿禰といふべき瓠公の宅地であつたのを瓠公が四代に歴仕した最後の王脱解が讓り受けて城を築いたものといふ。それが凡そ千八百年前のことで、瓠公も脱解も共に倭人であつたといふことが興を引く。倭人といへば新羅の國祖赫居世も倭人といふことになつてゐる。半月城は跡もなくなつてゐるが、氷を貯藏したといふ石の穴倉だけがある。

半月城から少し西に雞林といふ松林がある。朝鮮を雞林といふのはこれから始まつたと傳へられる。

脱解王の時金の櫃がその林の枝にかゝつて、その下で白い鷄が鳴いてゐた。櫃を開いて見ると小兒が出て來たので養つて王の子とし、それからこの林を鷄林と名づけたと物の本に書いてある。古い話だから事實だか何だか記事審査のしやうがない。

それから、南汶川を渡つて鮑石亭址に至る。今から千年前新羅五十五代の王が此處で曲水の宴を張つて置酒高會してゐたところへ百濟の軍勢が襲ひ來つて王を殺したと

ころ。新羅王朝はこの王で亡びたのである。細長いみかげ石でうねうねと曲みくねつた溝をつけた曲水の跡がそのまゝ殘つてゐるが、その當時山清水を引いてゐた水道が絶えてしまつて、今は水も何もない。此處に清流を引いて盃を浮かべて王が侍女と宴樂に耽られた昔もあつたかと思ふやうに物さびしく荒れ果てゝある。

慶州盆地は東西二里、南北三里の廣い平野で山の姿、野の趣が何處となく奈良の法隆寺邊と似てゐる。その平野の中に新羅朝時代の宮殿や寺院や堂塔の敗垣斷礎が至るところにごろ〳〵と轉がつてゐて、とても一日や二日では見盡されさうもない。急ぎの旅なればとて大抵に切り上げて博物館を見る。古朝鮮の石器土器の數々が陳列されてある中に、大正十年の秋に偶然掘り出した純金の寶冠と新羅王室傳來の玉笛とは殊に人目を引く。寶冠は皮も布も腐れてしまつてたゞ純金の裝飾とこれにつけた無數の小さな曲玉とが冠の形をしたまゝ金色燦然として殘つてゐる。これに附屬した純金の瓔珞などは精巧な細工を極めた。玉笛は玉を竹の形に刻んで孔を通したもので、吹けば朗々の音を出す。兩つながら天下の珍寶である。

慶州で馬場郡守から午餐の饗をうけ、食後新羅二十九世の武烈王の陵に詣してそのまゝ大邱に向ふ。今夜は夢に慶州を見るに相違なし。（六月三日大邱にて）

十八、新羅半月城

穂麥さやぐ麥田の中に大寺の
礎のみぞのこりてありける

慶州の舊都足跡みな史蹟ならざるはなし、臨海殿のあとをしのぶ麥田の中の池、その麥田のところ〴〵にうづくまれる巨石は、曰く皇龍寺、曰く何々寺なんどの礎のあとなりといふ。

芬皇寺の三層塔、天文觀測用の瞻星台、さては鷄林の發祥地より、曲水の宴をしのぶ鮑石亭、曰く何、曰く何、大和國原にくらべてやゝ狹けれど、慶州の盆地は凡て新

羅朝一千年の遺蹟ならざるはない、中にもその形によりて名づけられし半月城のあとは、今は氷室を殘せるのみ、昔のおもかげのしのぶべくもない。

村の子らは麥田のあぜをはしり來て、古き瓦のかけらをこれ召せとばかりに手に差し出し、我等一行を取り卷く、まさに麥秀の嘆といひたいが、その麥が旱りつゞきに赤枯れてゐる。

瓦賣ると新羅の子らは旱り田の
麥田の畦をはしりくる見ゆ

十九、曹公碑

臺灣總督兒玉源太郎大將が、高雄港の東方にあたる鳳山といふ街を巡視した折のことである、土地の代表者だちに曹公の碑に案内せよと注文した。

曹公の碑？　一體そんなものはない！　しかし曹公圳——圳これは水路のことでいうとよむ——の名はこの地方一帶の水路の名としてあまりによく知られてゐ、さては曹公の碑といふものも有つたかも知れないと、故老をあつめてたづねて見ると、たしかにこの街のさるところに有つたことは有つたが、今はどうなつた事やら久しい前からいつのまとなく影も形も見えなくなつたといふ。

有志の面々おづ〳〵と委細總督閣下に言上に及ぶと、藤園將軍はこの街を中心にして一帶の土地は、その昔曹公が私財を投じてつくり上げた水路により田畑が開け、今日に至るまでその遺澤をうけてゐるのではないか、しかも先人その徳を仰ぎて碑まで建てゝあつたのを、たゞ亡くして仕舞つたでは相濟むまいと正面から一本參つた。

それといふので街の官民草を分けて搜索に及ぶと、その碑石は街のさる小川の石橋になつてゐた、今日の曹公の碑はさうしたいきさつでいはゞ再建せられたものである。

百濟の舊都扶餘で關野貞博士が、このあたりに唐の軍將で百濟と日本の軍を打破つた劉仁願將軍の碑があるはずだといふので、仔細にしらべさしたら、半月城の山麓に

こはされたまゝ散在してゐた、これをつぎ合せたのが今米倉庫跡から送月臺への道筋に再建されてある。

慶州の大宗武烈王陵の前に陵碑の龜趺がある、八尺に十一尺の大さで龜は四肢をひろげて首をもたげてる、千二百年前の新羅美術の代表作として嘆稱されてゐるが、その龜趺と龜首の上に立つた碑身は亡くなつてどこにも見當らないといふ。

慶州武烈王陵の龜趺の前に立ちし時曹公碑の思ひ出が湧く、扶餘劉仁願の碑を前にしてまたその思ひ出を再びした。

この曹公碑の記事はどこかその邊の石橋でも裏側をしらべて見たら、存外龜趺の碑身であつたといふやうな奇蹟を見ないとも限らないから、何かのヒントにもと書いたのだなあと推察してくれてもいゝ。

まつりごとをとる者は地方を巡視しても、たゞ視察や歡迎や訓示などと月並な判に押した年中行事のほかに、一寸かうした寸法に出るとそこに存外味がでゝくる。これを政治の妙諦といふ、などゝいふような意味で書いたのだなあと推察してくれても差支へがない。

二十、大邱

新羅の古都慶州から琴湖江に沿ひ坦々たる一路大邱につゞいてる。大邱、たいこうともよんだが、今はたいきうと讀むことになつてる。慶北の首都として人口八萬を超え、琵琶山麓には洛東江を前にしてゴルフのリンクまで出來てるのだから、その發展振り推して知るべしである。

例によりて講演から視察と歡迎會、五日には張作霖氏遭難事件の寫眞なんど託送すべく社の飛行機は平壤から飛んでくるといふ。前九時に練兵場に至れば、かつて代々木原頭に訪歐飛行のかどでを送つた初風號の雄姿が横たはつて、新野飛行士、塚越機關士は山崎府尹、横巻聯隊長。河井民報社長はじめ官民有志に迎へられてる。十時と

いふに爆音勇ましく大邱の市上を一周し、蔚山方面へむけ虚空はるかに霞んでゆく何んとなく涙ぐましく胸が一杯になつてくる。

横卷聯隊長の案内で第八十聯隊を見物する、聯隊大隊中隊それぞれに軍事訓練の流儀もあるであらう。一行の案内せられたは第七中隊で、兵士は四國方面の出である。事務室には各兵士の頭から足の先まで圖面入りの細かい健康調査表ができて毎月脈搏の數まで調べあげてある。四國の地圖には各その出生地の處へ兵士の名前の紙がぶら下つてる。兵士の誕生日にはそれ〳〵手當もするといふのだらう、行き屆いたものである。この中隊長は幼年、士官兩校を經てきた鮮人朴大尉である。近ごろは朝鮮も臺灣並に將校採用の途は事實塞がれてる。かつて臺灣在職中ある臺人の學生から內地人で徴兵忌避すらあるのに、なぜ幼年學校に志願するのに入れてくれぬかと訴へられた事が思ひ出される。

午をすぎて大邱發秋風嶺を越えて湖南の分岐線大田で土地の有志に迎へられたのが

二時三十四分、驛長から只今大邱よりの電話で初風號は無事大阪に着しましたといふ傳言を聞く。今更ながら飛行機は早い。（六月五日大邱にて）

二十一、琵琶山

大邱の達城公園に沿ひ郊外にいづれば聯隊の練兵場がある、我朝日の飛行機が奉天の張作氏霖横死の寫眞を、平壤で汽車から受取つて大邱に飛び、更に一氣に大阪に突破した新野飛行士、塚越機關士を送迎せる思ひ出の記念場である、その練兵場を横ぎりて琵琶山のふもとに大邱のゴルフ、リンクがある。

洛東江の水はゆるく流れてところ〴〵に水のかゞやけるが見え、大藏經の版木八萬六千六百八十六枚を納めてある海印寺を以て名ある伽耶山の連峰が夕日に片照りしてゐる。

球拾ふ新羅の子らは聲あげて

夏草の中にすがた見えずなり
琵琶山に白雲ながれ高原は
夕かたまけて風いでにけり
水のながれところ〳〵に日に光り
はろけくもあるか洛東江は
夕日いま片明りして伽耶山の
高根一ところかゞやけり見ゆ

第三編　扶餘群山木浦

二十二、恩津の彌勒佛

大田から湖南線に入る、論山驛より右すれば百濟の舊都扶餘に通じ、左すれば恩津の彌勒佛にいたる。

盤藥山の中腹に灌燭寺といふ御寺がある、境内の石佛身長五十五尺を越え、この石佛は八尺の冠方十一尺の大蓋とこれに半せる小蓋をいたゞき、一丈餘の蓮華枝がぶら下つてる。それはそれで珍なりとして、冠蓋の間がコンクリートでかためてるから振るつてる。

來て見ればさほどでもなし富士の山といふ、富士山なほしかり初耳の彌勒において をや、よろしく青葉しげれる山腹にニヨキと立てる石佛はこれを麓より仰ぎて見るべきである。

二十三、百濟の舊都

楚人冠

今や、千二百年の昔唐と新羅の聯合軍に亡ぼされた百濟の遺蹟扶餘を訪ふ。

扶餘は京釜線の大田驛から湖南線にのりかへ、論山驛から四里ばかり行つたところにある。白馬江に臨んだ八十戸足らずの寒村で、平屋ばかりの朝鮮家屋が立ち並んだところ、今は昔の面影を見る由もない。が久しぶりでかういふ鄙びた物靜かな村に來たので、何となくのんびりとした氣分になる。

宿は松屋とて、元兩班の然るべき人が住んでゐた朝鮮家屋を改築したものとかで、柱も梁も荒削りのまゝかんなを用ひてをらぬ。そこへ舊式のラムプをつるして白馬江でとれたふなの煮びたしや鯉こくをさかなに、郡守の洪韓杓さんや川上警察署長や桑原郵便所長を始め、村の有志が催された歡迎の小宴に盃をあげる。村の朝鮮芝居がこれから始まるのだとて、笛や鉦や太鼓の音やかましくふれ歩くのが表を通る。全く村

だ。

この小村に打ちくつろいで一夜を明かし翌日朝早くから郡守や署長が案内に來てくれて、これらと共に僅に村に遺つた百濟期の舊蹟を見てまはる。わざと『僅に』と斷つたとほり、新羅の跡と違つて、こゝには遺蹟といふのも僅かであるが、郡守を會長にした古蹟保存會の盡力で、慶州以上の案内記や地圖や繪はがきが出來てゐる。近ごろは追々來り訪ふ者も多くなつたといふ。三國時代に一番日本と緣故が深く一番日本と親しかつた百濟のことだ、その跡を訪ふものゝ多くなつて來るのは當然である。現に阿部比羅夫もこゝで戰死したものらしいといふ。さういふ日本の戰死者のために忠魂碑を立てようといふ計畫が目下進行してゐる。

宿を出て先づ平濟塔を訪ふ。五重の石塔で、下層の四面にぎつしりと二千字に餘る長篇の碑文が刻まれてある。唐が新羅と力を合せて百濟を平定した次第を書いてある。その少し北に唐將劉仁願のために建てた自然石の劉仁願碑があり、その北に半月城址

一に扶蘇山といふのがある。

二十四、扶餘半月城

楚人冠

半月城は慶州にもあつたが、こゝのは白馬江の流れがくるりと半月の形に城を取りまいてゐるから然か名づけたといはれてゐる。こゝに登り行く坂路には瓦や土器のかけらが無數に散亂してゐて、砂利を踏んで行くやうな。拾つて見るとクスリの跡つやかな李朝時代の新しいものもあれば、遠く百濟時代ともおぼしい素燒の古いのもある。登つて昔の米倉の跡といふのに出ると、方二段ばかりの平地にそのころの瓦が一杯に落ち散つてある。その間ところ〴〵に當時の米が兵火に燒かれて黑くなつたのが原形のまゝ出て來る。郭公がしきりに啼く。

送月臺に出る。眼の下に白馬江がうね〳〵と流れて、對岸に遠く蔚城址を見る。こゝで扶餘の八景が一眸に集まる。それから山を下つて皐蘭寺の傍から舟に乘る。白馬

江に突き出た大きな巖石が列んでゐる。その一つを釣龍臺といふ。昔唐將蘇定方百濟討伐の時にこの巖上から白馬一頭を餌にして龍を釣上げたところ、白馬江の名これより始まると傳へらる。馬一頭を餌にした釣といふのも大きいが、そのまた釣つた龍を引き上げた綱の跡といふのが岩の上に太々とついてゐるのも大きい。兎に角話は大きいがいゝ。

また少し行くと落花臺といふのがある。半月城が落ちた時、城内の宮女が逃げ場を失つて、素足のまゝでこの岩の上まで來たが、岩の上で道窮つてそのまゝ白馬江に皆身を投げた跡といふ。如何さま後宮の佳人がしどけない姿をして相次いで水に入つた當時の樣は悲壯を極めたものであつたに相違ない。

舟中茶をのみながら語る。川上警察署長の話に、この白馬江に鯨魚といふ魚がゐる。形はなまづに似て長さ一尺から四尺に及ぶ。常に川の底深く住んでゐて滅多に捕れない。が、非常に美味なので前年齋藤總督から聖上陛下に獻納したことがあるとのこと

であつた。

舟行十餘丁にして、また扶餘の村に歸つた。村から江景に出る途中も何王のとも知れぬ王陵らしいものゝ立ち列んだのがある。思へば慶州はなつかし、扶餘は美はし、慶州を訪ふものは必ず後で扶餘を襲ふことを忘るべからず。（六月五日扶餘にて）

二十五、百濟の讀み方

任那これはニンナとよぶべきがミマナとなり、新羅これはシンラとよむべきがシラギとなり、高麗これはコウリヨウとよむべきがコマとなり、百濟これはペエーチエーとよむべきがクダラとなつてる。

內地では百濟の歸化人も數多い、中にも善慈王の子禪廣は持統天皇の朝に百濟の姓を賜はり朝廷に重用された、今日でも百濟文輔君は良二千石としてたしか栃木の知事になつてゐるが、いづれもクダラと讀んでる。

扶餘半月城の皐蘭寺畔より、舟に棹して錦江を下る、善慈王敗れて熊津に走るや、三千の宮女相率ゐて身を投じたといふ落花巖を左舷に仰いて幾何もなく、龜頭里といふ里がポプラの中に見える、龜頭里、クヅレと讀み、その昔日本から百濟に來る者、錦江をさかのぼりてこのクヅレの里に上陸した、そのクヅレがクダラとなまり、それが又百濟を意味するやうになつたのだといふ。

そんなことどうだつていゝぢやないか、クダラないといふかも知れないが、折角聞かしてくれるのだからこゝに書きつけておく。

二十六、敗れても史實

史乘に徵するに日本の百濟に拂はれたる犧牲は夥しいものである、こゝに百濟滅亡當時の分だけ摘錄して見る。少々長いがこれにつき意見があるのでしばらく辛抱していたゞきたい。

善慈王唐軍に降るや、王の從子福信は僧の道琛等と全羅北道金堤に據り、義兵を募つて回復に志し、日本に救援を乞ひ、唐の捕虜百餘人を獻じ、當時質として日本に在りたる王子豐璋を迎へて王となさんとした、こゝにおいて葛城太子（天智天皇）は、百濟および任那を回復するはこの時に在りとなし、齊明天皇に勸めて出征に決し、阿部比羅夫、河邊百枝等を將として舟師百七十隻を率ゐて百濟を救はしめ、また王子豐璋に織冠を賜ひ、多蔣敷の妹をこれに妻はせ、狹井檳榔、秦田來津等に命じて兵五千を附し、金堤の周留城まで護送して王位に卽かしめ、更に上毛野椎子、阿部比羅夫等に兵二萬七千を授けて新羅控制に當らしむるに至つた、しかるに百濟はその後內訌生じ、豐璋は福信と和せずして之を斬り、擾亂を極めたので、唐は新羅と協力して討滅を期し。熊津を發して周留城に向ふの時、白江口にて日、濟聯合軍と衝突して猛烈なる海戰となり、日、濟軍大敗し、豐璋は高勾麗に逃げ去り百濟は遂に滅亡した。

乃ち百濟朝三十一王六百八十年の社稷は日本の保護に負ふ處多く、日本からは少からぬ犧牲を拂つてる、その結果でもあらう百濟から內地への移住歸化せる數が中々多い、しかも日本の歷史はたゞ勝つたときだけ仰々しく書き立てるが、敗けた時は遠慮して？　一向に書いてない、事實は事實である、勝てば勝つたと敗るれば敗れたりと書いておくがよい、殊に百濟のために敗れ多くの犧牲を出した史實は、むしろより精しくより明確に筆にするがよい、これを朝鮮の歷史より逸してはならぬ。

朝鮮の側から見ても、日本から敗かされて日本は强いなあといふ感じもあれば、日本が援兵に來たが負かされて氣の毒だつたなあといふ感じもあつていゝ、いやどういふ感じを與へるからいゝ惡いといふではない、史實は史實である、まさに特筆大書すべしである、いな一歩を進めて扶餘に唐將劉仁願の戰捷碑があるのなら、當時はるばると日本から帆船で海を越えて百濟を救け、遂に陣沒したる戰將士のため記念碑を建てるくらゐの考へがあつてもよささうなものである、春畝公の銅像を建てんとする人

達はまた思ひを遠く千歳の昔にいたすべきである。

二十七、江景より群山へ

百濟の舊都に千年の昔を弔うて時餘ならず、江景の有志歡迎の席上で盛んに鮮米談を聞かされる。停車場へかつけけると我等一行のあとを追ひ廻した多木桑二郎翁にぶつかる。同乘して咸悅に下車すると、內鮮の小學兒童が整列してる。我等一行の歡迎とある。このあたり多木農場といはんより、多木王國とでもいふのであらう。一望際涯なき沃野のたゞ中で、老人は一流の采配を縱橫無碍にふり廻してるらしい。

黃登に臨益水利組合の三千四百町步の給水區域と、千町步にわたる周圍十里を越ゆる貯水池を小高き丘より見下す。東京の水源地村山の池が思ひ出される。約八百間の腰橋堤を橫ぎり裡里の街をぬけて、不二農場の事務所の廣庭に鮮人の豐年踊を見る。ドラ太鼓をはやし立て輪をつくりふら〳〵と踊り廻る。首をふり〳〵帽子の先の長い

布を右に左に眼まぐるしく廻す。布晒しを手でなく頭でやるのだらう、首が振り切れはしないかと氣になる。

夜群山に入り、花月の歡迎招宴に箸をとるもそこ〳〵に講演場にかけつける。公會堂では狹いとあつて、小學校の講堂をあてる。それで聽衆が千五百人？　二千人？屋外にも人の山をなしてゐたからまさしく盛會である。

あくる七日の午前には、楚君扶餘記の執筆にとぢこもつてる。不二農場の澤村專務大島內務部長、澤村群山府尹の諸氏に案內されて錦江の河口から外海に面せる不二農場の干拓地を見る。

群山の岩倉冷藏庫で東京行の白魚、蝦、大阪行のまなかつをが山の如く積まれてあるのを見る。まなかつをは大阪の名物となつてるから、どうも東京へはけませぬといふ。米穀市場では現物と延取引が部屋をならべてる。群山だけで內地へ移出の米約百五十萬石、そこで東京市の米の消費高の三割が鮮米で、橫濱、名古屋が一割、京都

は江州米がは入るので二割、神戸は七割、大阪に至りては鯨くなかれ九割といふ。

大阪のみなさま方、みなさまは群山から仕出したまながつをに箸をつゝきながら、市民の九割といふてもよいお米の九割といふてもよいみな〳〵鮮米を口にしてる。これぢや大阪と群山は切つても切れぬ仲である。（八日木浦にて）

二十八、多木農場

西鮮一帶は地勢上人口も密に農事改良なども他の地方より早く開けて、水利改良の施設は至るところに行はれてある。

總督府の調査によると全鮮の畓の面積百五十萬町を越え、うち灌漑の設備あるものの僅かに三十萬町歩、他は降雨無ければ收穫皆無となる所謂三年一作の天水畓である。まさしく臺灣の看天田に相當するものであつて、これに改良を施しうるもの約四十萬町、開墾干拓地目變換等により新たに開拓をなしうべきものまだ約四十萬町と稱せら

れ、それ〴〵土地改良事業補助金として、工費に對し原則として二割乃至三割の補助が支給せられ、その額すでに約二千五百萬圓に達してるとのことである。

筆者は臺灣當時水利事業に關係したゆかりもあり、全北の東津水利事業は親しく見たいと思ふてゐたら、腹下しで折角の亥角君の案内をうけたがその意を果さなかつた、しかし扶餘から江景咸悅を經て裡里群山に入る途上、臨益、益沃の水利事業を見ることを得た、もとより單に水利面積より見ればいづれも一萬町を越えずこれを臺灣嘉義の十五萬町に比すべくもないが、それは地理の關係にもとづくもので、事業の成果はたゞ大小の別をもつて見るべきでない、たゞかうした改良施設によりて、現に旱天つゞきで植付が出來ないと天を仰いで長嘆しつゝある折柄、これに隣れる水利組合の土地は水に惠まれて植付を了してあることは、まさしく土地改良の效果を如實に語つてゐるものである。

この方面には内地人で個人經營の大農場が散見せられる、大農場となると自然地主

はその土地からはなれ勝である、中には内地にありて殆どその地に足を印せざるものさへある。

筆者は多木粂次郎君に迎へられて、その農場を展望する君の住居まで案内された、多木農場の經營の仕方がどうあるのか、それは自分の知るところではないが、老人が毎年缺かさず出かけてくる、それも内地より却つてこの地に長く滯在してゐるといふことを聞いた時には、年を取ると次第に隱居する内地へ引き下がる、とかく引込思案の多い世の中に、老來ますゝ元氣なお爺さんであると感心した。

いづれにしても地主自體がその土地に親しんでゐるといふことはなにかにつけてよいことであると思うた。

二十九、不二農場

茨城縣友部の國民學校に加藤寛治君をたづねたのはこの春のことであつた。

その折加藤君から前任地山形における新庄方面の土地の開墾の話から、山形の青年が遠く朝鮮に移住し、不二農場などでは現に好成績をあげてゐるといふ話を耳にした。

内地で朝鮮人の内地移入が問題になつてゐるやうに、朝鮮で内地人の朝鮮移入が問題になつてゐる、これには東拓移民の失敗もあるらしいが、何よりも所在内地人が高利を貸した揚句土地を卷き上げたといふことが、假令同じ事が朝鮮人相互の間にもあつたとしてもそこが内鮮といふわけへだてから、かなり地元の人々の惡感を根強くあふつてゐるとの事である。

小作爭議は學校のストライキと共に今や内地で年中行事になつてゐる、感心しない事は流行したがるもので、朝鮮にも學校のストライキと小作爭議は内地に負けるものかと頻々として續發されつゝある、西鮮の地は古へ百濟の國である、百濟の多くの民は内地へ流れ込んだ、日本の將卒も百濟の地に流れ込んだものが少くない。いかに祖先の血汐は相交はつてゐても、それは昔話しであつて目の前の實生活とは沒交渉であ

る、小作爭議の一番多いといはんか地主小作人間の空氣の惡化といはんか、いづれにしてもさうした深刻味は人口の密にして內鮮のより多く接觸せる西鮮の地に多いに不思議はない。

さうした感じを持ちながら群山にくると不二農場の視察といふプログラムになつてゐる、昨日は扶餘から江景それから感悅、裡里と、至るところ視察と歡迎攻めに遇うた、暑い眞盛りである、所在差出されるまゝに冷いものをガブ〳〵呑む、群山に豫定より二時間も遲れて着く、宴會、つゞいて講演を立てつゞく。夜に入りて腹下しがはじまる、床をいづること四、五度、この朝の不二農場視察は御免をかうむりたかつたが、とにも角にも不二農場は朝鮮において眞面目に活動してる事業家藤井寬太郎君の經營にかゝり、京城からは澤村九平君がわざ〳〵東道の主人として來群してゐる、しかし何よりも我心をそゝつたものは加藤君の口から聞かされて小耳にはさんであつた不二農場といふ名である、山形村の移民である。

三十、藤井寬太郎君

藤井寬太郎君は現に全北、平北、江原の各地方に水利事業を起し、當初はかなり世間から危惧の眼をもつて見られてゐたが、とう〳〵臨益、益沃をはじめ大正、於雲、中央の各水利事業をものにした、本人は自分の力で仕上げた田は五萬町だが、一生の中に三十萬町の田を作り上げて見せると豪語してる、その藤井君の仕上げた約一萬町の田を潤せる臨益水利組合の水が群山の下流に流れてそこに大きな貯水池となり、池畔より城山に登れば、そこに多島海を脊にした丘上より、海に沿へる各約千町歩の干拓地が左右に展開せられる。

錦江側の千町歩は內地人の耕作により、これにとなれる千町歩は朝鮮人の耕作により、いづれも後には自作農となる仕かけになつてゐる、例の山形村はその內地部落の中の一つであつて、記念のため村の一角に一行寫眞をとる。

海に堺せる堤をぬうて城山に登る、こゝで不二農場の澤村君、群山府尹の澤村君、大島内務部長の諸君からいろ〳〵と説明を聞く。

一言にしていへば成功の緒についてゐる、そこに内鮮人の立派な自作農ができつゝある、互に競爭にもなり刺戟にもなり、成績も豫期以上によろしいといふ、しかしこの上に慾をいへば、内地人部落と朝鮮人部落を仕切つたのはどうかともおもふ。

三十一、干拓地

昔から世の中は優勝劣敗適者必存の原理に支配されて、大體智は愚にかち、强は弱を抑へ、勤むる者は惰ける者にまさる、土地も家屋も職業も必ずしも子々孫々にそのまゝ引きつがれてはゆかない、その間に榮枯盛衰はあざなへる縄の如くつきまとうてくる。

朝鮮人も向上發展して内地に出かけ、大地主にならなければならぬといふて見ても今のところ力が弱い、恰も内地でも次第に小農は亡びてゆく、土地は次第に兼併されてゆく、政府は自作農の創設にやつきとなつてる、しかしその植付られた自作農主が子々孫々どころか、果して年賦償却の二十五年間？　すら、健康だけでも無事につづいてゆくであらうか。

まあそんな先の先まで氣に仕出しては際限がないから、もとの道に戻つて、現在西鮮方面では内地人の手に土地が移る怪しからぬといふ聲が大分高い。

ところで干地開拓となると、この攻撃の的から外づれてくる、といふのは西鮮の地は干滿の差がいちじるしい、干潟をせきとめて干地をしあげる、かなり土木費もかゝる、また熟田になるまで相當の年月も經過せねばならぬ、しかしそれはすべて新生地である、苦情をいふのは海の方からおれの縄張りをせばめるとでも文句をつけるほかがない。

そこで此農場は益沃水利組合の一部であつて、灌漑區域は裡里群山の間約九千六百

町歩遠く大雅の貯水池から水路幹線の沿長十八里を越えてる。不二の農場は群山にとなれる。錦江に沿所謂干拓地である。

三十二、富末光太郎君

内鮮人を一處にゴッタ交ぜるといろ〳〵の混雜も起るであらう、やれ内地人の土地が增してきたの、朝鮮人の土地が減じてきたのと、いろ〳〵の文句も起るであらう、親子夫婦の中さへ仲違ひがある、同じ内地人村にすらそれ〴〵の鄕黨別でたがひに割據してる、そこに利害が相伴うてる、しかし大きな英佛獨伊も小さな北海やバルカン一帶の國々も、その國民相互の社交的氣分にはなんら分けへだてはない、それは九州東北といふやうな心持と大した相違がない、その間には無差別な氣分で相交はつてる、結婚もしてる、いはんや内鮮の間においておやである、色々と面倒も起るであらう、さうした不都合な側と、朝夕互に語り互に交はるといふ親しい好ましい側とが、脊中合せになつてるのを忘れてはならない。

西鮮論山郡光石面葛山里方面の部落では、多數の内地農民が朝鮮人と極めて和氣あい〳〵のうちに暮してるといふではないか、扶餘郡窺岩面の富末光太郎君などは、所在の朝鮮人から頌德の記念碑まで建てられてるといふではないか。

言語と結婚、これが内鮮など小さな事はいはない、凡て人類融和の基調ではあるまいか、隔てゝる慮りよりも相交はる親しみがより尊い。

三十三、全南の木浦　上　楚人冠

畫群山を發して夕木浦に入る。木浦に入るに先だちて全羅南道の首府光州より道の松下警察部長、池田農務課長、木浦より飛鋪府尹、山野商議會頭等來り迎へられ、車を同じうして語る。海南先生昨日から少し腸を痛めて絕食、氣勢甚だ上らず、成るべく安靜にしてゐてもらふ。

汽車に事故あつて木浦に着けるは定刻より二十分を後れて八時近くなる。宿に入りてゆる〳〵とふろに入り食事を取る暇もあらばこそ、八時過ぎより直に講演會場に臨む、幸ひにして群山にも劣らぬ盛會にて聽衆堂に溢れた。海南病人とも覺えぬ元氣で辯じ、次いで自分の講演を終つた時は十時半を過ぎてゐた。

翌八日は靜養かたゞ〳〵原稿と揮毫のために海南氏は宿に留まり。自分は飛鋪府尹の案内で先づ町の鎭守松島神社に詣し、昔の領事館であつたといふ府廳に入り木浦開港三十年記念博覽會に出陳した三代の木浦港の模型を觀る。始めのは三十年前の木浦でそのころには内地人五六、朝鮮人二十餘人の住民あるに過ぎなかつたといふ。なるほど家も有るか無きかにまばらで木浦鎭の邊は全部海になつてゐる。次には三十年後卽ち今日の木浦で人口三萬に及び、全南の産物米、綿、海草の集散地として次第に發展し行く樣がうかゞはれる。第三の模型は府尹の豐かなる想像力によつて畫き出された今から三十年後の木浦である。人口は内端に見積つて約十三萬に及び府の中央にそびえた府廳を中心にして放射道路が八方に走り、今日府内を貫く鐵道線路が海岸に移り走つて船車の聯絡をはかり、そのまた海岸といふのが、ずつと埋立てられて海の中に出てゐる。山には自動車道路が一周し、東北の町はづれには飛行機の着陸場がある。木浦三十年の發展を思へば、今後三十年にこれほどの變化あるべきは必ずしも怪しむに足りない。

三十四、全南の木浦　下

楚人冠

こゝから海岸に出て、府と商議の聯合歡迎の意味で木浦沖の多島海舟遊が試みられた。木浦の沖は大小無數の島があつて全羅南道全部に千七百四十七個を數へるといふ、道の諸公と府の有志と合せて二十餘名船に乘り移る。船は三百餘トンの沿岸警備船で金剛丸といふ。船の遭難を救助し、海上の密漁その他の非違を取締るものとして、もの〳〵しや舷頭に舊式の機關銃が一臺据ゑつけられてある。船發して後、この日の舟遊

に五六時間を費すことゝなり、それでは舟遊後上陸して木浦の官民有志の歡迎會に間に合はぬとて、この歡迎會を見合せてもらふことに決した。この趣をどうして陸上に通ずるかと見てあると、心配することなかれ、船にはちやんと無線電信の裝置があつた。

船は高下島を左に達里島を右に見て進み、達里島と花源半島との間の水道を通つて沖に出る。島を送り島を通つて應接指顧に暇あらず、瀬戸内海に似て瀬戸内海よりも變幻出沒の妙を極める。船中もたらすところの折詰を開いて清風の中に且つ酌み且つ語る。朝鮮に入りて以來この日ばかりくつろぎたるはなし。海南あらましかばと思つた。丁度この時木浦からの無電が私にとゞいて田中首相暴漢に襲はると報じて來た。

船は八口浦(のこと別に說く)に入りて玉島を訪ひ、こゝより引き返して六時前木浦に歸る。こゝでも夕餉をしたゝむるの暇あらず、急ぎ行李を纏めて海南と共に六時四十分木浦發の列車に乘じ、一路京城に向ふ。道の諸公また車を同じうして見送らる。松汀里驛に至つて全南知事石鎭衡君わざ〳〵光州より來りて長城まで車を同じうし

送迎の意を表せらる。石君は三十年前東京遊學中海南の財政學の講義を聽いたことがあるといふので師弟の關係がある。長城で、知事を始め松下部長、池田課長ら皆下車する。わづかに滿一日のおなじみながら、別れとなればさすがに名殘が惜しい。われらが惜める名殘を載せて列車は北へ〳〵と走つて行く。(六月八日夜)

三十五、八口浦玉島の母子

楚人冠

木浦の町々の後に山骨露はなる岩山がにょつきと立つてゐる。

儒達山とて海拔七百尺、昔はこゝに烽火臺があつて、南は海南、黃原、北は羅州、群山と相呼應したものといふ。かういふ岩山を脊にして前面に高下島靈岩半島を控へた木浦の地勢は何となく香港に似てゐる。

◇

この儒達山の嶺に立つて海の方を見下すと、千七百四十七島の大小島々が手に取る

やうに見えるさうだが、船でこの島々の間を縫うて行くと、行けども〳〵島ばかりで、あはや道窮して山に突き當るかと見れば、すらりと島影を横に入る水路がある。島を離れて一望さつと打ち開けた海原に出たかと思ふと、またいつしか四方八方山ばかりに取り圍まれて逃げ道も何もないやうな瀬戸に出る。

◇

かういふ島々山々に取り圍まれて、何艘船がその中に隱れてゐても外から見つけらるゝ氣づかひのない處に八口浦がある、どんな大きな船でも出入し得る口が八つあるからとてかく名づけた、この八口浦こそほ日露戰爭の當時わが聯合艦隊の隱れてゐたところである。後に海南氏に聞いたことだが、日露戰役中内地はもとより海外の通信界にまで通信速達の驚異となつてゐた祕密線であつた佐世保大連線はこの八口浦を根據地として沈設せられたものであつてその當時の苦心は大變なものであつたさうな。

◇

第一これに使ふケーブルが足りないので諸方から集めてくる、集めたケーブルを旅順艦隊の何時襲つて來るとも知れぬ外海に、命がけで沈設する、全く物質的にも精神的にも輕業のやうな危い仕事であつた。この危い任務に當つたケーブル沈設船沖繩丸とその任務を首尾よく果した主任技師梶浦重藏君の名は長く傳ふるに足る。

八口浦の中に玉島といふがある戰爭中海軍の御用を勤めた小笠原吉藏(號曉水)氏が戰爭後この島に居殘つて、自分の所有地と海軍から預つた耕地とを小作させて住んでゐた、小笠原氏はいはゆる當年の志士で多少の學殖もあり風流の道にも疎からず、俳號を曉水といつてよく木浦の俳句會へ出て來た位だから、島内の朝鮮人が推服してゐたのはいふまでもなく、この邊の島々に住む二十餘萬の朝鮮人はいつれも「ヲがさん」と慕ひ寄つて裁判制度の確立しない王朝時代には、島民の間に爭ひのあるごとに遠く來つて小笠原氏の裁判を仰いだほどだといふ。

その小笠原氏がつひ一兩年前なくなつた後は、氏の細君とその美しい娘さんとがこの地所の始末のつかぬ間は島から出て行くにも行かれず、二人きりで島に居殘つて朝鮮人の間に住んでゐる。それが小笠原氏の歿後小作爭議などが起つてさなきだにさみしい〳〵所が更に一段心細さを加へた。

◇

これを見舞つてやらうと松下警察部長がいひ出した、この絶海の孤島に母子二人が住んでゐてしかも美しい娘さんがゐると聞けば何人も見舞つてやりたくなる。これを船長にはかると、とてもそんな時間はないといふ。松下君なか〳〵屈せず、時間は作れば出來るとばかりで、兎角の押問答の末船から三十分で往復するなら、木浦の汽車の時間に間に合せるといふことになつた。

◇

それといふのでボートを下ろす、十餘人が乘り移る、一丁の櫓を二人で押してこぎつける、岸に着くまでに五分、岸からその家までの山坂道を走るやうにして七分、兎も角も着いた、小ざつぱりした靜かな家で、門口には朝鮮の女が麥をこいでゐた。案内を請ふと大阪辯のお婆さんが出て來て、何やらいひかけてはたゞ涙をぼッ〳〵とこぼして、お辭儀ばかりしてゐる。これを見たわれ等一同も暗然とした、何といふ劇的情景であつたらうか。今まで百姓仕事を手傳つてゐた娘さんが急に着物を着かへて出て來て、愛想よく一同を迎へる。上つてくれ、お茶をめし上れと下へもおかない。

◇

この娘さん名は安子、年十八、島に生れて島に育ち年に一二度木浦に出るきりで、ほとんど全く人の世を知らない。學校も何もないから學校教育は受けぬが、小笠原氏がえらい人であつたから自ら敎へて高女程度の事は心得てゐる。それにしてもこんなところに母子きりはさぞかし心細からう。母なる未亡人は耳が遠いので娘さんが一々

耳に口をよせて話して聞かせる、聞くごとにうなづいては涙をふく。

◇

こゝで時計を見ながら五六分ほど話して、また走るやうにしてボートに移る。來んでもよいといふのを母と娘とは遠くこゝまで見送つて來て、ボートの見えずなるまで磯邊に立ち盡してハンケチをふつてゐた。船中の一同もハンケチをふりかはしながらたれも一語も發しない。

船は全速力で走つて、木浦に着いたのは五時半であつた。これから木浦を訪ふ者は行つてこの玉島のけなげな母子を慰むることを忘るゝなかれ。（六月八日木浦にて）

第四編　金剛山

三十六、金剛山

朝鮮といへばすぐ金剛山を連想されるほど金剛山は名高い。

あまり名高くなると詩にも歌にも畫にもこれをうつしいだすべく荷がかちすぎてくる。富士、日光、奈良なんど評判が高いほどこれをうたふた詩にも歌にもこれはと思ふものが中々見當らない。

況んや、況んやである、金剛山と一口にいへばそれまでゝあるが、山域七平方里周圍二十里を超える連峰の大きなあつまりである、奇峰峻嶺が江原道から咸鏡道にかけその數一萬二千峰といふ、この峰から岩にそれ〴〵名がある、谿流は至るところに瀑となり潭をつくる、またそれ〴〵に名がある。

それらの名を知りたければ案内者やパンフレットを見るがよい、しかしどうしても

その土地に足を踏まねばこんな名前をならべて見たところで一向に面白くもかゆくも何んともない、そのまたところ〴〵に古寺名刹が殘つてる、全く辛うじて殘つてる、加藤清正の軍に荒されたとか燒かれて再建したといひ傳へられてる堂宇もある、かなり老朽ちてはあるが、朝鮮式に折々佛像ぐるみ塗りたくつてあるから、遠見には五彩が美しくいろどられてる。

内地で例をとれば北アルプスとか中央アルプスとか南アルプスとでもいふのであらう、その總稱が金剛山の三字で片付けられてるが、ともかく京城からでは探勝に短くて二日、あとは一週間、十日、二週間といろ〴〵の日程ができてる。われらは第一に京城發長安寺へ、第二日内金剛山の探勝、第三日は萬物相を經て外金剛溫井里へ第四日は玉龍洞九龍淵に往復して長箭より乘船、叢石亭の勝を舷上より眺めて夜深く元山に入つた。

そこでかうした金剛山に詩なかるべからず歌なくんばあらずといふても、どうもよみにくいうたひにくい、もと〴〵突兀たる危巖絶壁と急淵碧潭のつながりだから、雄大怪奇なる山容は春花秋葉に彩らるゝときも、眞青き夏も白皚々たる冬も、まづ漢詩むきであるとおもふ、といふて金剛山遊草の大きな册子も散見したが、その中の漢詩すらどうもうなづきにくいものが多い、觀じ來れば吾に歌なくまた山もない。

三十七、へ　そ

日本人は膝を出す股を出す、支那人は腕を出す胸を出す、朝鮮人はおへそを出す。腹を冷してはいけないと、わざ〴〵フランネルや毛絲の腹卷をしたがる内地人には乳首を出してる婦人へそを出してる子供が珍らしい、朝鮮にはかみなりさんがないと見える。

長安寺ホテル門前にて

山に登るとならべし駕籠を取り卷きし

村の子はみなへそを見せをり

三十八、長安寺

内金剛この一帶は朝鮮五葉の松が林をなしてる、この松の實が滋強丸並に取扱はれて賣り出されてる、香ばしくて旨い、落花生に似て是なるものである、この松やつげやもみの大木の林の中に長安寺ホテルがある。

内金剛長安寺ホテル

この谷の冷々しかももみの木の
梢やうやく明るみにけり
むかつ山あまりに近し日はさゝず
冷々しかも庭にいづれば

長安寺

長安寺どの棟もどの棟も草むして
岩山裾にこもりてありけり

三十九、長安寺山門

金剛山長安寺の山門といふてもきはめて小づくりな簡單な四本柱の山門がある、その柱の一本として眞直には立つてない、思ひ思ひにかしいでる、それなら倒れさうなものだが倒れもしない、もとよりピザ塔のやうにはじめからかしいだまゝに立てたのではない。

高麗朝でも李朝でもその晩年に倒れんとして倒れず、まさに此山門に似たるものがあつた、血氣な强壯な若者がチブスでコロリとゆく、年中藥瓶をはなさずに齡古稀をすぐるものもある。

山門の四つの柱はそれ〳〵に

かしぎながらも倒れもせざり

四十、佛の顔に泥

お寺では佛像の色のけば〳〵しく新しいのが目に立つ、木地は相當古いさうだが、胡粉で慈眼は盛り潰されさうになつてゐる。

住職が交代するとか、左もなくとも相當年限が立つと、佛像塗り代へといふ名目で御布施を貰ひに廻るらしい、内地の祠堂金の奉加帳を廻すと異巧同曲である、たゞ朝鮮では法燈の微かなるだけに、佛像塗り代へと號して仕掛けが小さくなつてゐるが、新羅佛高麗佛の顔へ般若湯の呑み代に一々胡粉をなすりつけてはたまらない、末世の僧は法を賣るといふ、まさしく佛の顔に泥を塗つてゐる。

四十一、正陽寺

長安寺から谿谷に沿うて里餘、いよ〳〵萬瀑洞にかゝるところに表訓寺があり、それより十町ばかり木賊のむら生える木むらを登れば正陽寺がある、眞夏の金剛山では秋の紅葉の景色にはおよびもつかないが、寺々の庭に咲いてゐる芍藥、それも麓なるははや散りがたであるが、兎にも角にもお寺と芍藥はふさはしい、木らんに似た香りの高い大山蓮華の花も道ゆく人の目と鼻を引く。

楚人冠は正陽寺の歇惺樓につき次の如く記してある。

正陽寺の歇惺樓、清水の舞臺に似たこの樓上から東を見やると、遠くは北に金剛山中の最高峰毘盧峰、南に彌勒峰、虎龍峰、白馬峰近くは釋迦峰、十五峰、地藏峰などと四十三の峰々が重なり合つて、とつこつたる頂きを露はしてゐる。どの峰も皆半腹から上は樹も何もない岩石の山骨で、その形が千姿萬態、それが遠近に隨つて濃淡の色とり〴〵に見える。秋の末この山骨がいづれも白いこけに覆はれて、その下に燃ゆるが如き紅葉を見るのはまたなく美しい景色だといふ。『歇惺樓は出づ白雲

の間、萬二千峰眞面に見れば、更に詩句なし更に山なし』と金炳冀氏の歌つたのは人を欺かぬ。『山なし』がいゝ。實にもわれや山、山やわれなる思ひである。

表訓寺から正陽寺へ

大寺の裏山道の木賊原

わが靴にふる音のさや〳〵

麓寺の芍藥の花は散りゐしが

この寺の花は咲きさかりをり

天そゝるくしき高嶺なみよろい

大空をせばみ區切りてありけり

四十二、萬　物　相

內金剛長安寺から自動車で十何里か長驅して溫井嶺を越すと、外金剛寒霞溪の谿谷に入る、鐵鎖により三仙嶽に登れば前面には五峰山、勢至峰、文珠峰をはじめ舊萬物相の危巖が天空に連らなつてる、更に新萬物相に登るといふよりは岩角を手足でよぢかつ這ひあがる、これが小一里だから眞夏の登山には少々あつすぎる。その危巖の突兀たる岩角を鐵鎖により鐵梯によりよぢ登ると新萬物相の突鼻に出る、うしろには峻峰が屏風のやうに競ひ立つてる、前は舊萬物相の三仙巖をはるかに谿谷の底に見下し、更に九龍淵一帶の連峰を仰ぐ正に雄大怪奇の妙を極めてる。

萬物相道

耳すませば又るり鳥の聲きこゆ
まこと深しもこれの深山は
ならの木立岩一面にちらばりて
ところ〴〵に木萩咲きたり
この夏の雨をとぼしみ谷川の

岩みな白くかわきたり見ゆ

四十三、九龍淵

萬物相から寒霞溪に沿ひ、木むら一ゐんにちらばれる岩石、その間に匂ふ夏萩をめでつゝ二里餘にして溫井里に出る、溫井里には名の示すが如く溫泉がある、長安寺と同じく鐵道局經營の西洋式のホテルである、これから神溪寺を經て玉流洞の溪谷に入れば、約十町にして九龍淵、そこには百七十尺の九龍瀑が一枚岩の天ッ邊から直下してゐる。

溫井里

むら山にむら〳〵雲の湧く見えて
　軒の雫のはや音すなり

九龍淵

瀑壺に近づきてひたに仰ぎゐれば
　いよゝ高しもこの大瀑は

まあ歌といへば歌だが、とても金剛山といふ氣分が現はせやうはずがない、同じ歌でも歌には門外漢である楚人冠の卽興。

岩かげを栗鼠ちよろ〳〵と出て來たり
　またちよろ〳〵と遁げさりにけり

が餘ほど氣が利いてゐる。

四十四、知り過ぎる知らなさ過ぎる

金剛山も京城からは今のところ元山まで遠走りして、元山から金剛山見物のための朝鮮郵船の定期船に搭じ、外金剛なり海金剛を見るのが定石になつてる、しかし鐵原より分岐せる金剛山電鐵が現在の終點昌道をさらに末輝里まで延長しつゝあるから、

開通すると内金剛へも至極便利になる。

今のところは一寸おつくうなため存外觀光客のよりつきが悪いが、また土地の處管の役人さん達は相手變れど主變らずで、同じところを幾度となく案内役に忙しい、なにゝせよ此邊の郡は金化淮陽いづれも内地の香川縣や鳥取縣の廣さはあるから、郡役所からにしてが、おいそれとはかけつけられない、況んや主管の江原道の道廳所在地春川からは三十里近く自動車を飛ばして來ねばならない、その上汗だくで山を登り谷を降るのだから生やさしい仕事でない、その勞をとつてくれた江原の内務部長小西恭介君、さては、尹、木内、國本、大熊の諸氏には一方ならぬ世話をかけた、ことに外金剛の眞珠潭や舊萬物相の危岩の上に、鳥のすき燒、鯛のちり煮などをバクつくに至りては、全く以て果報にあまる次第であつた。

さなきだに山また山、谷また谷、連日岩また岩にあき〳〵させられる金剛山案内に足を摺子木にする人達もあれば、またかけちがつて全くこの名勝に不案内の人達も朝

鮮内にかなり多い、全羅南道の知事石鎭衡君は私はまだよう參りませんといふ、元山の山崎府尹はもう在鮮二十年に近く、今は朝夕金剛山行名士の送迎に追はれてゐるがまだよういかないといふ、一番氣の毒見たやうなのは、元山と長箭間の朝鮮郵船航路の船長はじめ船員である、毎日のやうに往復してゐるが見物は出來ない、勿論時には長箭で出帆がのびて碇泊をつゞけるときがある、そんな時は雨風といふので矢ッ張り山登りは出來ない、いつもいつも鰻屋の門口まで來ては香ばかりかゞされてゐるのである、とかく浮世はまゝならぬ。（三、八、一六、人口問題の原稿を出し了りて）

第五編　北鮮より間島へ

四十五、行樂鄉元山

元山については楚子が既にしば〳〵筆に上してある、が一寸一言添へておく。

朝鮮も日本海に面せる方はなんとなく荒涼といふ感じを與へる、まして北鮮一帶においておや、元山、城津、清津なんど、いづれも住心地のよくない土地とのみ思ひ込んでゐたら、元山は朝鮮第一の健康地であり避暑地であるのを見て今更自分の迂かつさに呆れた次第である。

そこになると歐米人は京城元山間の鐵路開通前から、芝罘、青島さては島原の溫泉嶽など〻數へならべて、元山を好箇の避暑地と卜し、あの膠州灣にもくらぶべき永興灣のその一隅の元山港の南角明沙十里といふところに點々バンガローを建て〻ある、濱茄子の咲き匂ふ砂濱の中には、貧弱ながらゴルフのリンクもある。

明沙十里たゝにましろき砂濱の
　　こゝかしこなる濱なすの花

元山を挾んで明沙十里と相對せる松濤園の一帶は今や夏は朝鮮第一の避暑地として白砂青松の下海水浴に適し、冬はスケートによくスキーによく、テニスコートあり野球のグラウンドあり、葛麻半島より虎島、高島、新島など一帶の眺望を松原越に見渡せる丘陵をとり入れたゴルフ・リンクもある。

海原より眼の下にして尾の上より
　　うちおろす球は高鳴りゆくも

行樂の地のみとしても元山はよいところである、會寧まで北鮮線は全通した、平壤への鐵路が開通されたなら、金剛山探勝をかねて觀光の客ます〳〵多きを加へるであらう。

今日は茨木のリンクで大谷尊由師とプレイしながら、師と緣故淺からざる元山の極

めて平民的な安易なゴルフ場の思ひ出話を交はしたまゝに。（十一、四）

四十六、元　山

加藤清正の姫君瑤林藤夫人が德川頼宣に嫁したとき熊本から和歌山へ御供した數ある侍の中に杉村姓あり子孫楚人冠に至りてその名尤も現はる。

杉村楚人冠の祖宇兵衞、文祿の役に朝鮮に戰死したと傳へられてるが、いづこの露と消えたか分らない。たゞ北鮮で加藤軍がなんとかいふ大江に至りし時、單身敵前に河を横ぎりて對岸の船を奪取し來りしため感狀に與つたと傳へられてる、それがどうやら咸興の南を流るゝ城川江らしい。

京城をあとに金剛山に四日を送り元山に着いたのが十八日の午後九時、この夜例によりて歡迎會、あくる日の午前は視察、午後は講演とある。

元山灣の南方に葛麻半島が遠く突出してる。その首根つ子のところが明沙十里と名づけられて支那朝鮮あたりの洋人の避暑地になつてる。誠に名の如く明沙十里である、その白沙のところ〴〵に濱なすの花が匂ふてゐる。

ランチで元山港を横ぎりて北方松亭里、俗に松濤園につく。朝鮮第一の避暑地海水浴場としての設備はもとより野球場、テニス場、ゴルフリンクあり、盛夏の候は行客群をなすといふ。

元山は近くは白軍の避暑地として知られてゐる。日露の役には南下した露軍がこの地でくひ止められた。更にさかのぼりて文祿の役には京城から加藤、鍋島、相良の軍は元山近くの安邊から二王子を追うて北進したといふ。ゴルフリンクの道筋に日露の役當時の塹壕がそのまゝに殘つてる。第七コースから第八コースへの尾根を傳ふと永興灣を前にして虎島半島から葛麻半島、その間に點々せる島々が霞んでる。右の山麓には何百と知れない白軍兵や家族の墓石がちらばり、左には清正の陣所をかまへた望德山が聳えてる。いよ〴〵北鮮の旅に上らうとすると楚人冠は所勞とありて元山に居

残るといふ。

その昔宇兵衛殿が鎧を着けてテクつていつたところを汽車で腰かけたまゝではないかといふてもいやだといふ。仕方がないから二十日朝袂を分ちて北に向ふ。さびしい。

四十七、咸鏡線

苗植うる人ちかづけど白鷺は
身じろきもせで水田に立てり

咸鏡線と一口にいふと何んでもないやうだが、京城から元山、咸興、羅南を經て會寧まで五百三十七マイル、ほゞ釜山安東間とその距離が相似てる。元山以北が約四百マイル滿十四年間九千餘萬圓を投じていよ〳〵この九月から全通した。

こゝに北鮮線の全通がいかに重大なる意義をもたらしてゐるか、政治に經濟に國防に交通に、さうした理くつ張つた事はくど〳〵しくいふまでもない、たゞ京釜京義線のやうな馬の背を走つてゐる線路とちがつて、東海岸の怒濤岩を嚙んで天に沖する處、まさしく羽越線に似たるあれば、白砂青松を縫うてゆく長汀曲浦は、東海道、山陽線のそれにも劣らない、風光の明媚なるその身畫中にあるの思ひあらしむ、殊に我等一行は盤松群仙の十五マイル間を自動車連絡によりしこと〻て、

北鮮の野は遠々し我汽車は
咸南に入りて三日を經たり

かうした歌も今となりてははや忘れがたなくして再び遇はざる思ひ出となつてしまつた。

四十八、七十萬キロ

金剛山から二十六里北鮮の入口元山に出る。北鮮と一口に片附けてしまふが、咸鏡

南道は九州、臺灣より少し狹く、北道は四國より少し廣い。

楚人冠をあとに殘して、二十日朝元山より一路北に向ふ。午を過ぎて道廳所在地咸興に着く。この日內湖視察後咸興にて中野知事はじめ有志の歡迎會、次で講演、例によりて例の如し。

內湖は咸興の北三里の海岸にある朝鮮窒素工場で有名になつてゐる。姉妹會社の朝鮮水電は北方五千尺の高原鴨綠江の流域を流るゝ赴戰江の水をせきとめ、そこに周圍二十里に近く、貯水量二百四十億立方尺、有效水量百六十七億立方尺を包容する貯水池をつくり、逆に上流に向ひ延長十里の水路をうがち、赴戰嶺の中腹を貫き三ケ所を通じて六百六十立方尺の水を三千三百尺の落差を以て、日本海に注ぐ城川江に落し、こゝに十八萬キロの電力を起す、一キロ時が一錢につかないといふ馬鹿に安い動力を供給するといふ。

內地の電力事業と異うて、水利權を買ふに何十萬圓とお金がいるでなく、數多い府

縣廳へしらみつぶしにお百度を踏むに及ばず、沿道の町村に一々わたりをつけるため少からぬ時と金を費すといふでなし、そこへ人夫の勞銀が安くておとなしいと來てゐるから、工事費の算盤のけたが大分にちがつてくる。ひとりけたがちがふのみならず、內地では用水灌漑の水を橫取するといふので、よく沿岸町村へ賠償金をさし出すのが、この水電は例の濫伐で水の涸れがちな城川江に絕えず新に六百六十立方尺の水を放流するため、その水によりて新たに一萬二千町歩の水田ができやうといふのだから話が少々ほろすぎる。

その安い動力によりて在來のフランクカロー式すなはち一度石灰窒素をつくり更にアムモニアをつくる石灰窒素法に比し、空氣よりとれる窒素と水より電氣分解して得た水素を高溫高壓で化合せしむるカザレー式合成法によるから、窒素肥料の生產費が半減せられ、この工場では一年の產額約五十萬トンの硫安をつくるのだといふので今や水電工事から窒素の工場、さては搬出のための築港工事に咸南の天地は俄に長夜の

眠りから覺めて上を下へと上景氣の渦を卷いてゐる。

この水電は野口遵君が社長で三菱系統が大株主らしいが、まだこの外三菱及び久原の手で各二十何萬キロの水電の計畫があるから、合計七十萬キロの電力ができやうといふ。何にしても九州なみの咸鏡南道その一郡にしてが、中で香川縣が二つ三つ行水しやうといふ土地柄だけに、話まで大きくて氣持がいゝ。

四十九、脚戯

どこの村々でも男は相撲をとつてゐる、女はぶらんこに乘つてゐる。

陰暦のお正月と端午の節は、朝鮮では一年中の書入れの行樂の日になつてゐる。六月の二十二日はその端午の節にあたるといふので、羅南の町はづれ小高き丘の上は白き衣の人たち、それに赤に青に黄に色ものを着けた子供たちが打ち交りて群集の山をなしてゐる。咸北の羅南でおひるの講演を終つてから、安達知事の案内で自動車を丘

の上までのしあげる。相撲といつてもはじめは土俵のまん中に四つに組み、まづ坐り相撲の形になつてゐる。雙方の右の太股に布で輪をつくり、敵手は左手でその輪を握り、またはその輪の中にさし込む、右手ははなれることがあつても、左手は離せないことになつてゐるさうな。稱して脚戯といふが、土俵もなければ仕切り直しもない、踏切りの水入れのとそんな面倒もない。朝鮮服、洋服、着のみ着のまゝで極めて無雜作にばた〳〵と勝負をつけてゆく。これぢや四本柱どころか行司もいらない。今日から明日へかけて、五人抜きがかれこれ三十人位出來ると三日目に決勝となる。最優者の賞品は牛一匹。

このあたり露店の一面に軒を並べてゐること内地のそれと異ならず、たゞテント張りの飲食店が多い、七六つかしい店の名にならんでしるされてある李芳梅とか金玉蘭といふ乙な名前を所有してゐる化粧のものにお酌をさせて、よろしく散財してゐる光景は聊かもつて珍とするに足る。聞けばこの催しもこの飲食店連中が寄附をあつめ自

分達の營業のためといふ寸法であるらしい。

五十、ぶらんこ

ぶらんこの方は乘るものも見物するものも皆婦人である。白き裳をなびかせて、娘もお神さんも巧にぶらんこをゆする。次第にゆり上げると、前面に高くならべて釣つてある五つばかりの綺麗な色手まりにつまさきがふれる、ふれると鈴が鳴る。だんだんこの鈴を高くして行つて、最高のレコード・ホルダーが優勝者となる。

どうも十五六歳ごろから嫁ぐ、嫁すれば家居しがちである。偶外に出づるも例のちやんおつといふ長衣を被つて顔をかくす。もつとも北方の婦人は長衣をつけること稀に、この戯を樂しむこと盛んなやうであるが、あの朝鮮の婦人達がぶらんこを樂しむ、これが主に婦女子の遊戯となつてゐる、ことに正月のはねいた超板といふシーソー式の遊戯は、板の兩端に立つてピョン〳〵立つたまゝはね上るから、餘程熟練を要する

それが長く儒教の下におさへつけられてゐた婦人の遊戯として限られてゐたことは異樣にうけとれる。それだけに今一瀉千里の勢ひで男女ともに解放から脱線して爻なし會さへできつゝあるといふ、これからの婦人の將來が思はれる。

北鮮の一帶人煙疎らなるところ、端午粧ひの新衣の老幼男女が三々伍々遊び場へつながつてゆく。楊柳煙るところ、村の少女たちがぶらんこに裳をなびかせてゐる。この光景をバスや電車の乘り降りに押し合ひへし合うてゐる東京や大阪の人達に一寸見せたい。

五十一、國境氣分

會寧、その昔加藤主計頭清正が李朝の二王子を擒にしたと傳へられてる會寧、吉會線の名により吉林會寧間鐵路の終點豫定地として傳へられてる會寧の街に着いたのが、六月の末つ方の夜九時を過ぎてゐた、驛をいづれば支那の地方々々の名前などを

冠せる客棧の看板が夜目にもいちじるしくところ〳〵に見える、國境氣分といふ感じが起つてくる。

京を出でて幾日かを經し國境の
　　驛につきたり霧ふかき夜を

會寧の一夜が明ける、あくる朝清正を破つたとか何んとかいふ八義士の墓所なる丘陵に登る、楡の樹の間に五月雨あがりの濁流が見える、あれが有名な豆滿江だといふ、このあたり兩岸相よりて思ひしにたがひ狹い、しかも朝鮮側は山骨あらはれて岸に迫り、滿州側はなだらかな丘陵がうねり〳〵大海の波にも左も似てる。

　　雨あがりの水赤にごりながる見ゆ
　　楡の林のとぎれるひまに

會寧より江にそうて圖們輕便鐵道が上三峰につゞき、こゝより鐵路江を渡りて間島に入る。

上三峰の村を懷にした丘陵の上には、昔ながらの烽火臺が三坐點在してゐる、上三峰實は上三烽らしい。

　　のろしあぐる塔立てり見ゆ國境の
　　小さき村の裏山の脊に

これより更に江に沿うて鏡城に至れば、街の大路のたゞ中に古い樓門が巍然として聳えてる、名づけて受降樓といふ、いつ受降したことがあるのかとたづねたらさうした事蹟はなかつた、たゞ景氣付けてさうした名をつけたのらしい、受降されてやうがされてなからうがいづれでもよろしい、受降樓！　名前がよい、以て國境氣分をそゝるに足りる。

五十二、間島入リ

　　大なみのうねりの中にたゞよへる

小舟にぞ似たる我豆汽車は

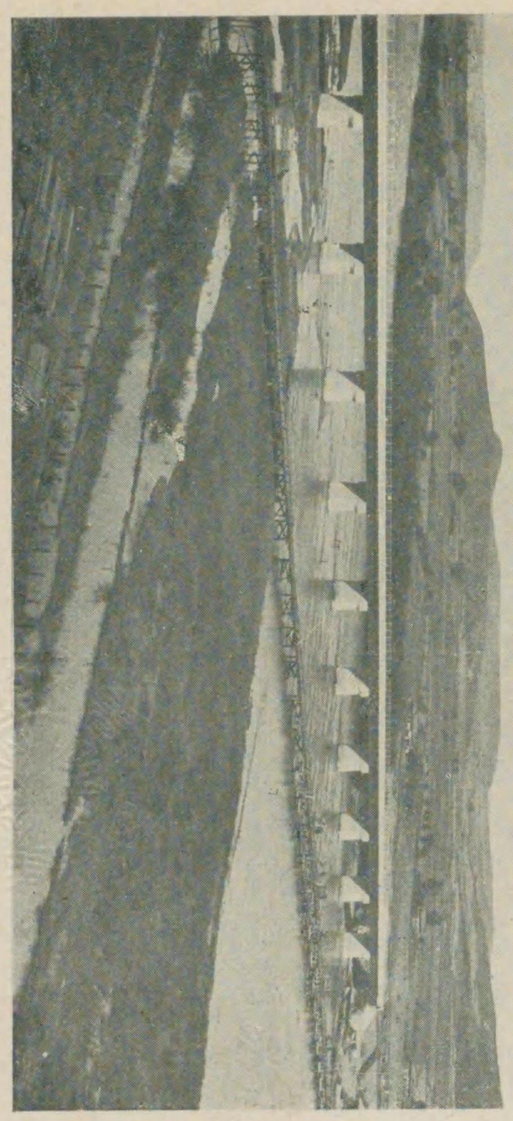
居は心をうつすといふ、地勢は自から國民性をつくるといふ。

とにもかくにも間島に境せる豆滿江の朝鮮側の山骨秀でたるに反し、滿洲側は丘陵起伏せるも、それはなだらかなる大きな波のうねりにさも似て、ところ〴〵楊柳幾株しげりて支那家屋の點々せる外は、波の底にも波の峰にも一樹一木もなく、すべては大豆畑となりてきはまるところがない。そこに滿洲氣分がたゞようてる、そこに支那民族の氣分が匂ふてる。

この大きな波のうねりの中を天圖線の輕便鐵道が縫うてゆく、右に左にゆるき勾配を求めて豆汽車がガタコトと動いてる、端午の節とありて白衣の列、そこに幼き子ども達の赤き青きが交りて畑中を長々とつゞいてゆくが見える。

窓外近く家三、四あり、楊柳のもと朝鮮の娘の子らはぶらんこをゆさぶつてる。

廣野縫うてつゞきゆく赤き青き衣



橋鐵們圖ろ渡を江滿豆〜島間

こゝにしてあひし端午の祭

五十三、間島夜話（毛谷村六助）

文祿の役には、清正は第二軍に將とし、四月の十八日釜山に上陸、五月二日南大門より京城に入り、更に二王子を追うべく鍋島直茂、相良頼房等と北鮮に乘り込み、六月の十七日元山のそばの安邊に至り、沿道を風靡して七月の十六日が摩天嶺の戰となり、更に長驅して豆滿江畔の會寧に鞠景仁の手により捕へられし二王子を受取つたのは二十三日になつてゐる。

北鮮に入つて足かけ四日越しで、今豆滿江のほとり醉月といふ料理店へ自動車を横付にし席上美形がお酌をしてくれてゐる。やれ〳〵北鮮の旅は草臥れたというて見ても、加藤清正の三十七日間にくらべると、もとより物の數でもないどころか、鎧具足で長物を手にし、道なき道をよくも三十七日ぐらゐで來られたものである。

これから江を渡りておらんかい討伐となつたのが八月の上旬で、長途の軍旅に兵士を少しづゝ沿道に殘していつたから、この時分は手兵五百ぐらゐに朝鮮兵も同じ位を徴發して今の間島地帶を攻略し、たうとうこの地點から引返してゐる。

鈴木總領事の東道により、例のロシヤ式の馬車で泥道を蹴立てながら、龍井村學校居留民會商埠局なんど訪問する。夜に入りて歡迎會あり、卓上でいろ〳〵雜談の花を咲かせたが、二十餘年間この地の朝鮮人教化につとめてゐる光明會の日高丙子郎君が、總領事館の陳列館に出品してある錆た日本刀に日本の大釜、それはまさしく清正軍の遺したものであらうといふ。日高君の說では龍井から四五里ほどのところに延潭といふ古戰跡があつて、そこで毛谷村六助が討死してゐるといふ。前日會寧では永井勝三君から、六助は慶南の晉州で死んだといふ說と、江原道の三涉でいぶし殺されたともいふ說と二說ありと聞いた。まあ同じ事ならいぶし殺されたといふよりは、滿洲の果で討死したといふ方が聞えがよろしいから、卓上滿場一致で六助は延潭城討死といふことに可決する。たゞし毛谷村君の名は彥山權現誓助太刀といふ義太夫や芝居の藝題でおなじみになつてゐるだけであるから、果してさうした人があつたのかどうか、よしあつたにしてからが、どこで討死したのか、討死したあとで妻のお園がどうなつたか、何分豆滿江に沿うて毎日二三十里荷馬車や自動車で、曳き廻されてゐる旅の空で詮議立てる暇もなし。內地の方にてしかるべく御調査相成りたし。（七月二十三日）

五十四、白日旗と弔旗

間島龍井村に入つたのが六月の二十三日であつた、すでに張作霖將軍の死が公にされてあつたが、當地方にはまだ何等公報に接しないといふので、支那街にも支那側の御役所にも弔旗らしいものも揭げられてなかつた。

翌二十四日夕暉春に入り、あくる二十五日には同行の安達咸北知事が知縣や軍衙を訪問する、知縣らは一行のため歡迎の宴を張ることになつてゐたが、張將軍死去の公

報があつたといふので、宴會は中止となる、市中は三日間の音曲停止、七日間の弔旗掲上となつた。

同じ滿洲の地でありながら張將軍死去の公報が數日おくれてくるといふも悠々閑々たるものであるが、公報のより早く新聞の上に傳へられてる朝鮮領内の支那街に至りては、弔旗どころか我等一行間島入りの前に途上過ぐるところ、羅南の街にも會寧の街にも、そこに青天白日旗が軒並に掲げられてあつた。

便衣隊が入り込んでのことか、革命軍の宣傳部の手が廻つてゐたゝめのことか、そんなことは知らない、たゞ我等は金の力劍の力は一時であり、思想界の動きは永久であるといふことを知れば足りる、孫文の三民主義は金や劍の上に超越した信仰となつてゐる。もし滿洲の地も人々の思ひのまゝの旗を掲げしめたなら、弔旗は掲げられなくて青天白日旗の多く掲げらるべきは、羅南、會寧のそれといさゝかも異なることはなからう、何んでもないことだが色々なことがそれからそれへと考へさせられる。

五十五、局子街と龍井村

吉敦線の延長線が局子街に通じる、いや龍井村を通さねばならぬと、火花を散らして激烈なる競爭運動がはじまつてる。

局子街は支那の道尹の所在地である、龍井村は日本の總領事館所在地である、さては支那人と日本人との競爭かといへば左にあらず。

日本人同志が異國のはてゞ我田引鐵のため青筋を立てゝいきり立つてるのである。あんまりいゝ圖ぢやない。

内地でも人口萬をもつて數へる町には、少々廻り道をしても鐵道がくねつて行く、いはんや人口稀薄なるあのだゝつぴろい吉林省の奥地においてをやである。

それも龍井村、局子街その間僅かに四、五里といふ、一方立てれば一方が立たぬといふではない、兩方立てゝ身が立つのである。

どうも廻り道になるからといふ、それならば將來局子街行とか龍井村行とかの支線をつくり、年中時間表から客車貨車の聯結分離と、さうした仕事の面倒さも厭はないのか、さうした事も考へて見るがよい。

なにもステーションは街の中へ首を突つ込まねばならぬことはない、いゝ加減なところで雙方の間を縫うてゆけばよい。

それをあたまから不倶戴天のステーションと心得、赤眼を釣り合ふとは眼が近すぎる、とかくあまり近すぎると却つて見えなくなるものだ、まつ毛は見えないからね。

五十六、馬賊夜話

二十四日朝龍井村をあとに、間島の原野をまた豆滿江岸三峰に引きかへす。自動車で鍾城に入つたのが午後一時、受降樓畔郡役所で安達知事と落合ふ。知事は琿春の知縣と團長への就任挨拶をかねての訪問とあるから、儀容堂々とビックの自動車で乘り込まうといふ。ところが連日の雨で支那側三里半の道は馬脚を沒し自動車は思ひもよらないとある。

慶源から鐵線渡船でこゝに三度豆滿江を渡り、琿春街道に出ると、なるほど道が惡い、馬車といふてもバネなしの荷車、それへ藁を敷き毛布をかぶせてある。琿春官憲の騎馬隊が歡迎の敬意を表すべく列をなして擧手してくれるのもよろしいが荷馬車の上から答禮してゐる形はあまり感心しない。

それよりも嬉しくないのは、泥水をはね上げデコボコ道をがたつかせるバネなし車の動搖は腹にひゞいて痛くなる、頭へヅシン〳〵こたへてくる。これで又明日この荷馬車で送りかへされて、あと三十里近く自動車でのりつゞけとあつては又第二回の下痢疑ひあるべからずと大いに悲觀する。はからざりき、約一里ばかりにして一臺の自動車が迎へに來た。琿春の方では、荷馬車の入城は夜に入つて危險であるといふので無理矢理に一臺仕立てゝ來たといふ。同じデコボコ道でも自動車となるとまさしく雲

泥のちがひである。どうして道路攻撃などは勿體ない。途中三ヶ所ほどで下車したが、どうやら無事琿春に入る。これが地獄で佛といふのであらう。

夜は琿春城内の協同永で歡迎會が催されたが、席上で今夜馬賊の襲來があると傳へる者がある。なんでも山の方から町に來た朝鮮人の話とある。

端午の節句のころはよくやつてくるといふ。いや秋の高粱が茂つたころだといふ。襲來するときは幾度も前觸れしさん〻草臥れさせたころを見計らつて來るといふ。何れにしても第三の琿春事件が起ると、僕の通信も四段抜きぐらゐの大見出しで東西朝日の一の面へ晴れ〻しく載せてくれるだらうが、殺されては元も子もない、さりとてこの前の時の知縣の弟のやうに人質にとられるのもぞつとしない。

こんなことを書いてると、琿春は住心地がよくないやうだが、水が良いから健康地であり、大豆や材木が豐富に出る、石炭も多量に埋藏されてゐるといふ。場所が日露の國境に割り込んでゐる滿洲の突角地帶だけに、豆滿江岸の鐵道ができ上ると著しく

面目を改めてくる　相　がない。

領事館で東京放送局の時事ニュースとあつて一同擴聲器の前に耳を立てゝゐると、名古屋で故加藤金佛首相の銅像除幕式のニュースが放送されてる。さりとては便利になつたものである。

馬賊來ると人言しげき支那街の
銅鑼の音絶えて夜は更けにたり

五十七、下　岡　三　峰

琿春城内協同永の歡迎會の卓子には、例により終りに近づいたが飯を盛り上げた分と、おもゆ澤山のお粥の分と二つづゝ茶碗が並べられる。南鮮で腹下しをしてから服藥をつゞけてる上に、今日の自動車荷馬車でかなり下つ腹に激震を與へたから、謹しんでお粥をすゝる。それにつけても思はず連想されるは下岡三峰である。

下岡君は北鮮の旅で病を得たといふが、こゝへも來たのかねとたづねると、葭村警視は下岡總監の旅程は殆どあなたと同じでありました、ちやうど約一年前六月始めのことでした、會寧龍井村邊でも腹痛を訴へられてゐたさうですが、慶源では大變下痢されました。一同琿春はお止めになつたらと申し上げたが、なあにかまはないと、そのまゝ强行されましたが、矢張りこのお粥のおもゆだけすゝられてゐました。どうも連日の惡路と宴會、面會に視察それから睡眠不足、何分にも相手變れど主變らずでしたから……。

安達知事は詞を引きとつて、あれから京城にかへつて卒倒する、醫師は癌の疑ひがあるから兎に角早ぐ上京の上靜養をとすゝめたが奥樣はをられず、總監は二三日引籠つたが、あとはまた登廳する、例の產米增殖問題の調査といふので自分は連日呼出されてゐたが、腹が痛い〳〵と口にしながら、いつも成歡眞瓜ばかりしやぶつてたうとう九月まで押し通して上京した。

安達君の詞がつゞく。上京の折に總監は富田儀作翁に言づけしてくれといふことであつた、翁は總監の小學校の先生とかであつたさうだが、總監はいつか京城から二里ばかりの地點に、二千圓ばかりの簡素な家を建てゝくれと翁に賴んであつたらしい、ところで今度この產米計畫問題の成行次第では、或は再び朝鮮の地にかへらぬかも知れない、まして腹も下してゐるが大分懷も下してる、かた〳〵あの別莊はやめにするから、よろしく傳へてくれとのことでしたが……安達君の詞はこゝで絕えた。

公共のためには多大の犧牲も拂つた富田儀作翁、翁の高麗燒には涙ぐましいエピソードもあるが、それはまた別に筆にする折もあらう。今や翁は舊によりて健在なれども、その高弟下岡三峰は職を賭せる產米計畫は通過したが、その身は長へに歸らざる客となつた。

北鮮に旅して、君が曾遊の跡をしのびながら、こゝに琿春の夜話をそのまゝ錄して君を弔ふの辭とする。支那街の夜ははや更けた、かすかに銅鑼の音が聞えてゐる。

五十八、下　汝　坪

豆滿江の下流に下汝坪といふ處がある、吉林方面の大豆は冬は氷上を馬車で、夏は帆船でこゝまで下つてくる、海まで出られると至極便利なわけであるが、土砂が流されて河口を塞いでゐる、下汝坪に陸揚げした大豆は雄基越の山道を六頭、八頭の荷馬車に仕立てゝ雄基港に出で、かへり路には小麥粉を積んでかへる、滿洲でも小麥はできないこともないが、國際の交通が發達すると、地勢上豐凶不順な小麥をつくることをやめて小麥はアメリカにまかせ、滿洲の大豆は歐米のすみ〻〻までのびる、メリケン粉の饅頭が吉林の山の奥にまで行き渡らうといふ、今雄基越の二十里？　ばかりの山道は、登りも降りもかうした荷馬車の引切りなきつながりで、ガタゴトと凸凹道に砂塵を揚げてる。

豆滿江に沿ふ國境線の雄基トンネルの工事のためらしい、谷間のところ〻〻にトロ

の軌道が見える、この國境線ができ上る時は吉會線と聯絡を通ずるころである、荷馬車で大豆メリケン粉を運ぶ豆滿江、朝鮮中でも一番なじみの薄かつた咸北の北のはてが、日本と滿洲さらに東西れんらくの大道となるもはや遠からぬことになつてる。

五十九、三國一目

二十五日朝琿春をあとに、四度豆滿江を渡つて、慶源にかへる。

慶源で知事一行と分れて、雨後のでこぼこになつた泥土を豆滿江に沿うて、雄基まで二十五里を突破したといふたら勇ましいが、誠にもつて嬉しくなかつた。折々は楚人冠を引張つて來たら、さぞかし國境氣分に感興を湧かすことだらうともおもへば、またようまあ一緒に來なくてよかつたともおもふ。

下汝坪から左へ江に沿うて道を沿岸の突角慶興にそらし、町の後の西峰臺に登れば、脚下に洋々たる豆滿江の水が降りつゞいた雨に水嵩をまして、濁流たう〻〻と中洲の

楊柳の枝を浸してゐる。對岸の平野は琿春縣の黑頂子一帶の地であり、それから大盤嶺の山の脊が全く平地に降り、更にまた極めて低い〳〵丘陵が東南に走つてゐる。これが露國がボシエット灣がほしいのと、朝鮮に境を直々に接したさに、その昔濡手で粟のつかみどりで、でつちあげた露支の國境である。もと〳〵低い丘陵であるから、その丘のはざまからはボシエット灣の水面が見える。灣に臨んだ煙秋、露國ではノウスキフスコエと呼ばしてゐる街はあり〳〵と肉眼でも見える。肉眼で一國をまたげて更に他の一國を展望するなどは一寸變つてる。

梅雨晴れの明るき日なりロシア街を
こゝにして見つ支那の野を越えて
ボシエットの海添村の白きかべ
かげり日うけてうす光る見ゆ
山の峽にボシエット灣の水見えて

そのむかつ丘に家ちらばれり

とにもかくにも、この日は好天氣のため豫定の如く、がたんごとんと終日ゆられ通し、登り降りの支那馬車とすれちがひつゝ無事雄基港に着。

雄基は今豆滿江線の起工で新進の生氣にみちてゐる。光永電通社長の令弟喜七君が民間代表者として采配をふつてゐる。この夜食道樂といふしやれた名の家で歡迎の宴、あくる廿六日は朝自動車を館洞嶺上にはせて羅津灣を見おろす。引かへして雄基で臨時講演一席、午に至り乘船、夕景吉會線延長問題につき委員の上京といふので、上へ下へと渦を卷いてゐる城津に入港、三上府尹、岡本北鮮日報社長の東道により、抹高公園に登つて市中展望、『みやこ』の別館で歡迎の宴もそこ〳〵に清津座で『北鮮の將來』を講演、終つて自動車で一路夜十二時近くに朱乙溫泉へ……やれせわしない(廿六日)

六十、東萊と朱乙

朝鮮は地震が少ないだけに内地のやうな溫泉には惠まれてない。

しかし、釜山から八マイルといふから郊外といふてよい、金井山のふもと東萊に清澄な鹽類溫泉が湧いてゐる、吾等一行はこの地に一泊してあくる日蔚山にむけ自動車を飛ばせた。

大田の郊外にも儒城溫泉がある、土地の人々から一遊を切にすゝめられたが、旅先がいそがれてその厚意に添ふことが出來なかつた。

咸北には清津から南下して羅南、鏡城を經て朱乙驛に近く、清流に沿うて朱乙溫泉がある、川原の砂風呂もあり俗に朝鮮別府の名あり、一日の湧出一萬四千石と稱せられてる。

朝雄基より羅津に往復し、雄基にて講演、正午乘船、夕景清津着歡迎會から講演、直に自動車を驅つて朱乙に着いたのが夜十二時、靈泉に溫まつて熟睡、あくる朝より夕方まで机によりて本紙既載の元山以北の朝鮮遊記數片に、内地の雜誌への寄稿いくばくかを一氣に呵成し、その夜は安達知事はじめ有志の諸氏と浴衣がけで打くつろいで北鮮最後の小宴を開いた。

七月の炎天つゞきとはいへさすがに北鮮の一角である、霧見る〳〵谿谷を埋めて涼風肌に寒く、この一日はガラス戸をしめ切つて浴衣の上にドテラを重ね着した。

霧見る〳〵谷をうづみて冷々し
浴衣の上にどてら重ねたり

この朱乙には蒸饅頭が名物とある、名物にうまいものなしといふがこの名物は全く以てうまい。

六十一、松　竹　梅

雀海中に入つて蛤となり、代議士日比谷に出でゝ罐詰となる世の中に、梅が朝鮮に移されて杏になつたとしても、アンじたものではない。

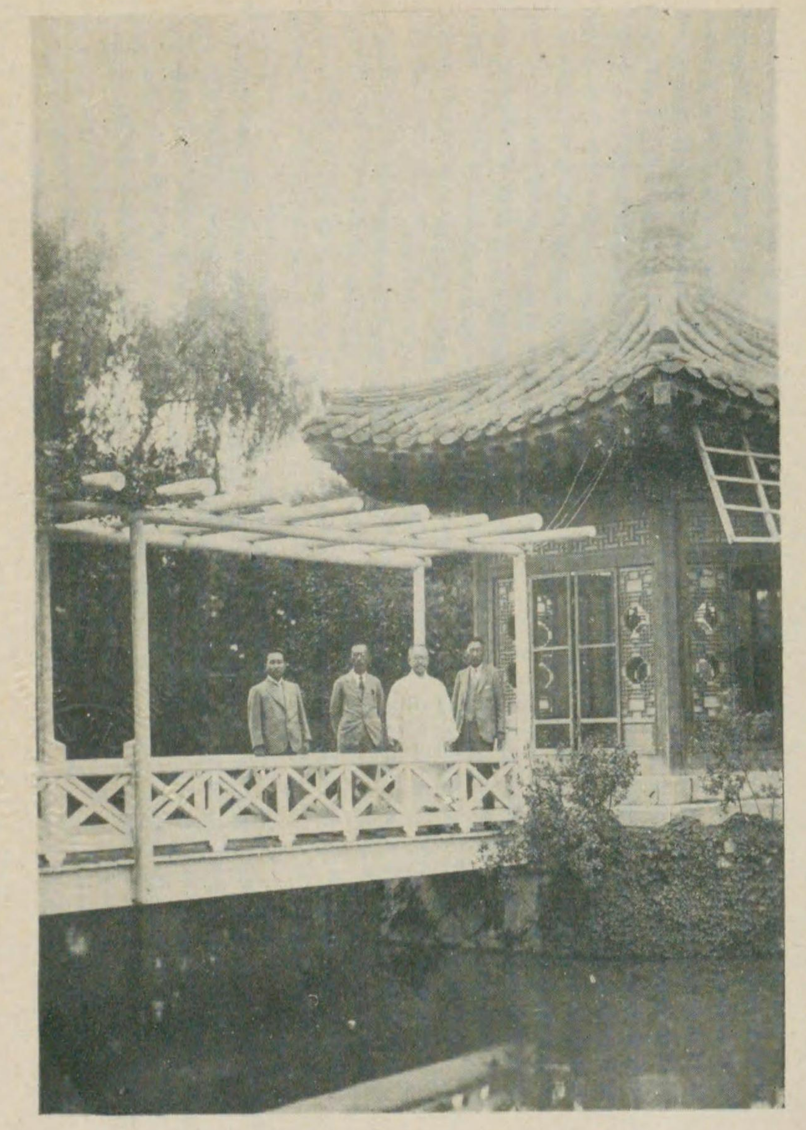
鏡城の苗圃で青葉をつけた並樹を梅ですかとたづねたら、梅は梅だが今は杏ですといふ、南鮮の一部の外はどうしても梅のまゝでは育たぬらしい。臺灣で梅の珍らしいことは珍らしくもない、櫻が次第に變質することも不思議はないが。内地と氣候風土の似通うた朝鮮で、梅が杏に化けるとは面白い。それにしても京城で妓生が盛んに扇面に梅を書いたが實物を知らぬにしては、うめえものだつた。

まだ一寸面白いのは竹が南鮮に限られてゐることである。ところが、牡丹に獅子がつきものになり虎が竹につきものになつてゐる。その竹がやうやく南鮮一帶に限られ、北鮮から滿鮮にかけては虎はゐるが竹がない。この虎たるや、和藤内や清正とおなじみであり、近くは山本唯三郎といふ人が、咸南端川の奥で虎狩をして虎大盡とうたはれた。なにも唯さんの顔が虎に似たといふのではない事實虎豹を退治した。今でも北鮮で年に二三頭はとれる。この間慶州石窟庵附近で三井鑛業の牧田瓊君の一行に社の同人天野壺外などが巖を傳うて虎の子が三疋も、ノソ〳〵と歩行いてゐたのを親しく見たといふ。岩の上は可笑しいなといふと、南鮮にしても竹林は山麓から平地にある。虎は岩上にうそぶくが、密林にはゐないといふ。そこで竹に虎といふことは支那や印度は知らず鮮滿や北支では全く通用しないことになる。雅邦の龍虎の圖などは朝鮮ではまさに問題になる。

清津の歡迎會から引つゞき講演を了つたのが二十六日の夜の十時、北鮮の旅もこれで無事にプログラム通り終了した。かくて自動車を驅つて朱乙溫泉に入つたのが夜の十二時。

梅と竹と揃ふたからは松がないと赤にならない。朝鮮の松も大分松毛蟲に痛められてゐるが、松毛蟲もまだ北鮮にはいらない。この地方は東北から函館邊と同じ緯度であるから鈴蘭の花咲くはことはりながら、松茸が馬鹿に多いのはかはつてゐる。土地の人はいふ、松茸狩に行くと餘り多すぎてとりきれないから却つて面白くない。清津や雄基では百匁五錢位だからといふ。

名物廣島牡蠣は皆元山沖から廣島に移植されるのだといへば、膳に上してある海苔、これは全羅南道木浦邊の海岸でとれる。それが東京、大阪へおくられると、淺草海苔といふレッテルを貼つた罐にはひる。一體淺草といふ名からして隨分人を茶にしたものだが、またそれがはる〴〵朝鮮に舞戻つて食卓に上ること、なほ臺灣の鰹節が土佐節と銘を打つに異ならず。中味はどうでも、レッテルの世の中なるかな、そこらあたりの閣下方エライといふ面々を見てもよう分かる。



右杉村楚人冠　中央朴泳孝　左下村海南

第六編　開城鎭南浦平壤

六十二、白　衣

長安一片月、萬戸擣衣聲といふ句があるが、朝鮮では江水のほとりでも背戸の小川でも水の流るゝところ婦人たちは白衣を洗ふてる、その洗ふた布帛を木や石の臺にのせて根氣よくたゝいてる。

白衣のおこりはかなり古いやうで、いろ〳〵の故事來歷が傳へられてゐる。李朝の時世祖は九年の長き父の喪に服したので、百官有志から國民擧げてたうとう白衣になり切つて仕舞つたとも傳へられてるが、朝鮮は五行において木に位し時において春たりといふので、高麗朝でも又李朝に至りてはしば〳〵白衣に代ふるに青衣を用ふべしといふ布令も出したといふが、結局白色が朝鮮民族の趣味にぴつたりはまつてゐるのであらう。禁令の出た一時限りでいつの間にかもとの白衣になつて仕舞ふらしい。

十年振りで朝鮮の地を踏むと長煙管が餘程少くなつてる。「カッ」といふ冠をつけたのもあるにはあるが散髪も相當眼につきだした、しかし白衣に至つてはもとの如くである。或朝鮮人は若い人達は大分色物を着けるやうになつた、冬になれば黒衣も相當見られますといふ。内地の朝鮮人たちは洋服和服中には勞働者の多くは法被をつける。時に白衣の連中もあるが洗濯してくれる女房がをらぬから、鼠色を通り越し墨染まがひになつたまゝ我慢してる。問題はこれからの婦人達の洗濯といふ事であらう。

朝鮮の婦人たちは「チャンオッ」といふ長衣を頭から被つたものだがもう殆ど見當らなくなつてる、朝鮮の婦人たちは紡績工場に通ひ出した、學校の女生徒たちは内地並にストライキまで擧行してる位だから、さうおとなしくいつまでも年中朝から晩まで洗濯ばかりしてもをられぬだらう。

或る朝鮮人は白衣の不經濟な事はよく分つてる、しかし自發的に改める事は困難である、こんな事は政府が思ひ切つて或る猶豫期間を置き一切白衣禁止の發令をしてほしいといふ。中にはいや内地の白衣の商人保護のため斷行しきらぬさうななどゝ飛んだ與太をとばすのもある。

清朝が明の民を辮髪にするためには血を見なければならなかつた。理髪師の商賣道具には殺人刀がぶら下つてゐた。長江の水ために赤くなつたとさへいはれてる。その辮髪でも一度習ひ性となれば之を廢止することが容易でなかつた、これは衣服を改めよといふのではない、たゞ色物を用ひよといふに過ぎぬ。夏向きなどは白衣はすつきりとしてよい、たゞ年中白衣一點張りといふのはよくない、しかし内地で分かり切つた廣幅宣傳が中々實績をあげぬに徴しても、色物を用ひるといふことは容易ではあるまいとおもふ。しかしもう十年とはつゞくまい。いやつゞかしたくない。(六、一五、長安寺にて)

六十三、朝鮮雅樂

朝鮮の雅樂は支那より傳はりて樂器は六十種の多きを算し、今李王家に金部十種、石部二種、絲部十種、竹部十一種、匏部一種、土部三種、革部十三種、木部四種、計五十四種が殘存されてる、その多くは既に支那になくなつてゐるも不思議の一つなれば、この雅樂の日本に傳はらなかつたも不思議といはねばならぬ。

李王職の雅樂部にはこれらの樂器が陳列されてある、我等の一行の前に合樂、細樂管樂、絃樂なんど親しく奏せられたが、素人のわれらには樂器の數多くかなり大袈裟なものであり、そのしらべはゆるやかに哀調を帶びてるといふやうな感じを與へた。

朝鮮雅樂はそのまゝの保存もさることながら、この樂器のあるものは日本の樂よりもむしろ西洋管絃樂の中にさし加へて然るべきものがあるやうに思はれる。

六十四、開　城

楚人冠

海南氏と再び京城に合して共に開城に至る。開城は高麗朝五百年の舊都であつて、いはゆる高麗人蔘の本場である。高麗時代には人口二十萬に餘つたといふが、今でも四萬を超えてゐる。南大門を中心として本通りが四方に通じ、朝鮮には珍らしい瓦葺の屋根が見る限りつゞいてゐる。李朝の世となつて以來、こゝの住民は政治上に失脚した埋合せとでもいふか、專ら商賣のことにいそしんだため、開城には今に商人が多く金持が多いといふ。市中を歩いて見ると、どことなくおつとりした舊都の面影が見える。他所では早くなくなつてゐる婦人のかづき姿も、こゝではまだ珍らしくない。

高麗の太祖を葬れる顯陵に詣る。松林にとり圍まれた小高いところに例の土まんぢうが立つて、その前に朝鮮式の色彩美くしいお堂がある。地幽寂、まことに王者の陵墓にふさはしい。高僧道詵の豫じめ地を相して王の壽陵と定めたといふのもうなづかれる。

善竹橋に高麗の烈士鄭夢周の斬られた跡を弔ひ、專賣局出張所に人蔘栽培の樣子を拜見し、更に轉じて高麗の王宮址滿月臺といふに到る。宮居は殘りなく消えてゐる

が、その礎石や石階や泉池の跡が今をさかりと茂れる夏草の間に殘つて、如何にも昔の榮華を思はせる。小川を渡つて神鳳門の跡といふに入る。それから幾つかの門の跡を過ぎ、一度埋まつてゐたのを又掘り出したといふ二十餘段の石階を登り盡すと、そこに本丸跡といふべき廣場に出る。會慶殿のありしところといふ。これから山を登るに隨つて、長和殿元德殿など相列んで一番高いところに長慶殿の跡がある。こゝまで來て四方を見渡すと、野山河の形勢京城のそれに似て、如何さまありし昔の都の樣が思はれる。俯仰低徊去るに忍びず、海南先生しきりに歌を思へども成らざるに似たり。

開城を去つて夜大同江畔の兼二浦に入る。（七月二日）

六十五、人蔘の見目かたち

朝鮮といへば人蔘が連想される、その人蔘の本場の開城に、總督府專賣局出張所をたづねて一と通り朝鮮人蔘の講釋を聞いた。

水蔘や紅蔘や白蔘、さては紅尾蔘、雜蔘後蔘なんど、いろ〳〵と人蔘を分類しての講釋の受賣りをしてもよいが面どくさいからやめる。

たゞ人蔘の値段の馬鹿に高い安い開きは、その成分がどうといふにあらずしてどうもその格好にあるらしい、そのまた見目かたちについては御得意先の支那の御客樣達の注文は中々やかましいらしい。

あの人體によう似た人蔘、兩股をうんと廣げてひゞをぶら下げてゐるあの格好には、上野の國展の彫刻部ではないが、その曲線美にいろ〳〵の好みがあるらしい。

この間富山の製藥會社廣貫堂を見物したとき、樟腦や薄荷いろ〳〵の香料が丸藥に交ぜられるのは、飲み藥として左もあるべきことゝ思うたが、その丸藥に金色や銀色をつける、またそれを分離器にかけて光澤を出す、別に藥に色もつやもどうでもよろしいやうなものゝ、さうもならぬさうな、矢つ張り馬子にも衣裳といふ。

人蔘の見目かたちを八釜しくいふ豈それ無理からざらんや、人蔘買うて首くゝるた

めしさへあるものを、あまり姿が悪くては藥の利目もとんと薄くなる。

六十六、太祖の陵

人蔘の本場開城は高麗の舊都である、街を去る十餘町にして太祖の陵がある、赤松にかこまれた丘の一角は青芝生の長く廣き斜面となり、丹塗りの箭門から百歩にして拜殿、更に二百歩にして太祖の陵の前に登りつめる、自分の見たかぎりでは陵のうちにも太祖の陵が一番感じがよい。

ゆきゆけは赤松山の松のしげり
いよゝ深しも陵はちかし
みさゝぎへ爪先あがりの青芝生
ふみしめのぼる眞夏眞ひるを
石人とならびて腰をおろしたり

蟬のなく音のいや高きかも
陵を四方よりつゝむ松山の
赤松の幹すく〳〵と立てり

六十七、鄭夢周

開城の郊外といふても町はづれの小川に、石橋はあれども石欄を架して通行を止め、別に小橋をその側に作りて行人を通じてる、高麗朝の名臣鄭夢周が後の李太祖當時の李成桂將軍の息芳遠等の手にかゝり命を致せる處で、善竹橋として松都名勝の一になつてる、その側に成仁碑といふがあり、一代忠義萬古綱常と刻されてあるが、泣碑ともいひ盛夏と雖も乾かないといふ。

このほか子男山の東南に鄭夢周の舊基松陽書院があり、その東谷を隔てゝ遺墟の碑があり、李太王の御製御筆の危忠大義光宇宙吾道東方賴有公といふ碑閣が善竹橋畔に

あり、李朝英祖の道德精忠亘萬古泰山高節圃隱公といふ碑閣もある、後世鄭夢周といふ人のいかにも惜まれ尊まれいてるのが推しはかられる。

鄭夢周がもし殺されても高麗朝は亡びなかつたらどうであらう、また殺されなかつたとしたらどうであらう、大石良雄は主君淺野内匠頭の松の廊下の刃傷があつたばかりに、義士の仇討ちともなりその名を竹帛に垂れた、無官太夫敦盛は平家の滅亡に當り一ノ谷で殺されたばつかりにその名が長へに殘つてる。

板垣退助翁は岐阜の變でそのまゝ亡くなつてゐたらどうであつたらうか？　西鄕隆盛、大久保利通、星亨、原敬、乃木希典さては伊藤博文の諸名士のその終りが尋常で無かつたことは、いかにも痛惜に堪へないやうなものゝ、その尋常ならざる終りによりて、その聲名がいや高くいや長へに傳へられてる、鄭夢周もえらい人には相違なかつたであらう、しかし殺されなかつたらどうであらう、今極東の遊子は自動車を善竹橋畔によせ、車より降りて側の小橋を渡り泣碑の前に低徊してる。

死！　悲しいやうではあるがいつかは免れざる關門である、遁げてものがれ得ざる死、急いでこれを迎へるにもおよばないが、遁げ隱れるにも當らない、人間も死なぬときまつたら槍切れない、死や愛すべし尊むべし、京城の半日を朴泳孝翁の邸に送つた時、しばゝ死生の巷を出入した朴翁は、死はしばゝ覺悟しても死なしてくれなかつたといふ、死は安し死に處する難し、その死を然るべく他人さまから處してくれる、觀じ來れば伊藤春畝は仕合せであつた、鄭夢周も仕合せである。

といふやうな感じを抱きながら、鄭夢周のあとを逐うて亡びたる高麗朝滿月臺の遺跡をしのぶべく、今車は人蔘畑の間を走つてゆく。

六十八、滿　月　臺

高麗三十二世四百七十餘年の首都であつた開城の梨井里の丘上、松嶽山を負うて王城滿月臺の舊址が殘つてる、石階につぐに石階礎石は數十町にわたりて、當時の壯大

なりし規模を物語つてゐる、宮居のあとゝしては朝鮮はもとより内地にもその類を求めがたない。

開城に人蔘の本場を見るもよいが、高麗の舊都として慶州とゝもに捨てがたき思ひ出のあとである。

高麗の王の宮居のあとをなつかしみ
　瓦のかけら拾ひけるかも
宮址の高處に立てばあをゝし
　人蔘の畠つゞけるが見ゆ
月の夜をくゝし段石に腰かけて
　砧の音は聞くべかりけり

六十九、兼二浦

今更兼二浦の講釋でもあるまじ、工兵中佐渡邊兼二といふ人の發見にかゝるといふ、よいところではあるが、また流れのあるところだけに不便の點もないではない、がここにそんなことを一々かき立てゝ見てもしやうもない。

大正三年世界大戰の好景氣とゝもに生れて、蘆荻の岸が萬餘の人をあつめし街となり、銑鐵十萬トン、鋼材五萬トン生産の仕かけが出來上つたが、大戰は終る海軍は軍縮となる、今鋼材工場は休んでる。

とにもかくにもその工場の半を閉鎖して猶ベイしていくだけに漕ぎつけてゆくのは、大三菱の背景の力であり、松田貞治郎君の德と材にまつところが多い、しかもこの製鋼工場とても一朝有事の時には活動するだけの準備がつゞけられてるといふ。

低燐銑であるとか、なほ技術に立入つた苦心談もあるやうだが、素人はうつかり手にせぬことなり。

戰はいろ〳〵の工業を生む、またこれを殺す、大資本はその息の根をつゞけて次の

時の至るを待つ。

この夜舊友九大の湯川又夫君と兼二浦の倶樂部でめぐり合ふ、圓かなる大輪の明月は大きな〳〵林立した眞黑な煙突の上に青い光りをなげてゐる。

七十、大同江

河川とは河床盛上りて土砂堆積し舟楫の便をなさず、一度大雨至れば濁流滔々處在に水害をかもすものなりといふのが、近ごろの日本の河川の定義になつてる。

この定義にあてはめるためには、山林は濫伐することになつてる、禿山は水を支へ切れず土を持ち切れず、降つた雨は一氣に土砂と〻もに押流される。

我等鮮内旅行の時は日でりつゞきで苗の植付もできない、咸南の城川江の如きはただ砂礫のつながりであつた、聞く所によればかつて鐵橋の橋臺を築き上ぐべく掘下げると、河床の地中深くに帆船の檣頭が現はれたといふ、それがその〻ちの霖雨で大水

害を來たしてる、內地とてもみなこの寸法を逐うたもので、とても植林位で間にあはない、放水路など〻いふ窮策で御茶をにごしてる。

これを遼河の岸の營口、白河上流の天津、さては楊子江の支流黃浦江畔の上海などに想到すれば、更にアンヴエルス、ロツテルダム、アムステルダム、プレーメン、ハンブルグ等の港が河口をさかのぼつてはるか上流にあるを思へば、港もよいが河口をさけないと土砂を流されるからと、橫須賀、吳、佐世保、舞鶴みな河なき地に軍港があり、いづこの築港にも土砂橫流を苦にする日本といふ國は、もと〳〵狹い狹い小つぽけな上に、山嶽重疊江岸に迫り、まるでさゞえのやうな島國として地勢上無理からぬとは知りながら、誠に厄介千萬なことだとおもうてゐた。

朝鮮にしてが洛東江も漢江も豆滿江も舟楫の便が惡い、鴨綠江にしてが浮洲が多く小蒸汽が龍岩浦から義州あたりまでやつとである、大同江は少しはましだと思うてゐたが、それはたゞ平壤から見た大同江であつて、これより約二十海里下りて兼二浦に

至れば、優に五六千トン級の船が碇繋できる、更に二十海里を小蒸汽で下つたが河身はその幅一里を越え、かつては日露の戰役に艦隊も軍用船も數十隻悠々と此のあたりに列をなし假泊してゐたといふ、ましてや鎭南浦さてこれからさき何れのあたりを河口といふべきかよくは分らないやうだが、とに角河口はるかにさかのぼりて、水深干潮時にしてなほ十五尋より二十尋、河幅は一里を越えるだらう、一萬噸級の船は樂々と出入できる、かうした河が朝鮮にあらうとは迂濶千萬にも今まで知らなんだ。

日本の河川の定義を下すときも、但し大同江はこれを除くといはなければならない。手數なことだが結構なことである、河にもかうした河もあると、內地の觀光客には平壤から鎭南浦までランチで洋々たる大江を下つて貰ふこと眼學問の一つなるべし。

七十一、鎭南浦

楚人冠

鎭南浦に晝ごろ着いて、遠く江西の古墳を見たり、富田儀作翁の製陶所へ寄つたり、

公會堂で講演をしたり、講演の後歡迎の宴に列したり、相當忙しい一日であつた。富田翁の三和莊に歸つて寢たのは一時過ぎであつた。もつとも昨今一時過ぎに寢ることは珍らしくない。

江西の古墳は高勾麗時代のもので、俗に三墓里と稱ふるところにある。大中小の三つの土まんぢうが列んでゐるから、かく名づけたといふ。その三つの內二つだけは中を開いて、修築を加へて、嚴重に保存されてゐる。何分高勾麗朝から二千年ほどの間に盜掘されて墓の中には何も殘つてゐないが、墓の四壁に玄武朱雀青龍白虎の壁畫が色彩美はしく殘つてゐる。この墓の保存には、こゝの郵便所長田村幸一氏が大に力を盡したといふ。

富田翁の製陶所は高麗燒の製作で聞えてゐる。翁が高麗燒の製作を志てから今日に至るまでの苦心は全く涙ぐましいくらゐのもので、やりかけては失敗し、失敗してはやり直し、仕舞には齋戒沐浴して一心に神佛の加護を祈つた揚句はつと悟るところが

あつて、始めて出來上つたといふ傳說めいた話がある。海南氏と私に何か記念のために書いたら燒いてやらうといふので、い、氣な二人はそこらの園遊會の樂燒でも燒いてもらふつもりで、いくつも〳〵下手な字を書いて渡したが、後で聞くと、高麗燒は五百度から二千度の熱を加へて燒くもので、少くも三日はカマの中に入れつゞけに入れておかなければならぬ。それで入れたものがかならず旨く出來上ると極つてゐるかといふと、火の加減で靑かるべきものが白かつたり、赤かるべきものが靑かつたりする。われらが使つた黑の繪の具でも鐵が入つてゐるから、その鐵が解けてい、具合に黑く出すには、なか〳〵の苦心だといふことであつた。好漢惜むらくは高麗燒を知らず、二人共ちと書き過ぎた。（七月三日）

七十二、西崎君の御辨當

兼二浦の工場を案內されて午前十時といふに、鎭南浦の富田儀作、西崎鶴太郎、川添種一郎の諸氏に迎へられ、ランチで大同江を下る、悠々たる江水を蹴つてゆく心持はまた別段である。

鎭南浦に上陸するとすぐとある私邸に導かれた、今日は市街見物のほかにはるか遠く江西古墳の見物があり、夜は歡迎會に講演にかなり日程も立てこんでる、我等一行とあはせて主客その數三十名に近い、やれ配膳やれお酌となるとこりや大變だなあと時計を見ると正午はすぎてる。

なんにも取り設けも御座りませぬが、粗末な食事が用意してありますのでといふ、一同椽側から室內ににぢり込むと、そこにお辨當がならんでる、辨松よりも器も上等なら中味も見るからよろしい。

重ね蓋を明けながら楚人冠は、こりやとても氣が利いてるといふ、全然同感である、全く氣が利いてる。

主人はこの度鎭南浦に公會堂を寄附した西崎鶴太郎君である、同夜はこの公會堂で

初講演開きに臨む事になつてる、幸先がよい。

七十三、鯛のあらい

九州のさる田舎であつたとおもふ。

都からはるゞ〳〵先生の御光來とあつて、午餐の仕度に主人は部屋を飛び出したきり影も姿も見せない、十二時はすぎる、十二時半、一時、一時半、二時になる。

汗だく〳〵の主人がやう〳〵に座敷にゝぢり出る、配膳となる、どうしたことかと聞いて見ると、先生御光來とあつて鯛のあらいに煮物、燒物とピチ〳〵してゐるのを仕込んで來たのが、どうしたのかもう上つて仕舞つてゐた、これではといふのでまた一里にあまる漁村に使を駈けつけて、生きたまゝの鯛を仕入れてくる、今庖丁をおろしたばかりで御座りますといふ。

あまりの有難さ？　忝なさ？　馬鹿々々しさに怒るにも怒られない、まあ自分の

二時までの空腹凌ぎはよいとして、その夜はさる町でまた歡迎講演の日程になつてるのが御蔭で番狂はせになつた、歡迎振りもこゝまでくるとたゞ滑稽だけではすまされない、あいつには全く參つたよといふ先生その人は杉村楚人冠である。

西崎翁の客間で辨當の蓋をあけながら、楚生のこりやとても氣が利いてるといふ詞を耳にしたとき、ふと楚君の鯛のあらいの昔話が思ひ浮かんできた。

七十四、三和花園

富田儀作翁の記事は下岡三峰の下に一寸紹介してあつたが、高麗燒と富田翁だけでも朝鮮の史乘から逸しられない、その高麗燒の工場にも足を入れた筆者は、なにか一言せねばならないが、これは別の折にゆづる。

鎭南浦の丘陵に大きな花園がある、三和花園といふ、はるかに九月山の靈峰に對し大同江を見おろして眺望が廣い、園内には朝鮮古代の石像や燈籠なんどが、松樹や花

卉の間に點在してゐる、好事家の食指動いて止まざるものであらう。

筆者の一行はこの花園の一室に一夜をおくり月明を仰いだが、この花園を紹介するは花園そのものゝ好適なるほかに、花園を全然開放してあることである、白衣の人、老若男女ところ〳〵の樹蔭に休んでゐる。

よく生かして使はれてる三和花園、そこに富田翁の氣分がたゞようてる。

七十五、平壤

楚人冠

今から約二千二百年前、漢が朝鮮の北部一帶を領してゐた時、これを四郡に分けてゐた。樂浪郡はその四郡の一つで、今の平安、黃海、京畿の三道を含み、その政治の中心たる郡守の所在地は今の平壤附近にあつたらしい。近年この邊から樂浪時代の漢の遺物が發掘されて、エヂプトのツタンカーメン王の遺物發掘とほとんど同じほどの興味をそゝつたことは、あまねくわが國の人の知るところである。

平壤から自動車を走らすこと二十分ばかりで、この古都の跡に出る。なだらかな起伏が廣々と續いて一望廣濶、如何さま都大路の跡とも見える。何でも日韓併合の當時何で狹まくるしい京城を棄てゝ都を平壤に移さなかつたかと惜がつてゐる學者がありさうな。

この平野の中に何千と數ふるほどの古墳がある。大抵は盜掘の洗禮をうけたもので、全く泥棒の手のついてないのは、二三十しかあるまいといふ。やゝ小高くなつたところに一條の土壁の跡がうね〳〵と殘つて、土地の恰好が昔の郡廳の跡らしいといふのがある。この邊に高勾麗時代の瓦のかけらが無數に落ち散らばつてゐる。

この夜陰曆十七日、十時に講演を終つてから、青木知事、松井府尹の諸公に招かれて大同江畔の一旗亭お牧の茶屋に觀月の宴を張る。江の中流に堤燈をぶらさげた舟を浮べて月を賞するものがあちらこちらに見える、妓生の高らかに歌ふ聲が水を打つて聞える、ああ二千二百年、人來り人去つて今に同じやうなことをくりかへしくりかへ

し人間はしてゐる。（七月四日）

七十六、お牧の茶屋

朝鮮の舊都は高勾麗の平壤、新羅の慶州、百濟の扶餘、高麗の開城、李朝の京城と一巡見物して見たが、何んといふても國都としては平壤が一番よろしい。

せゝこましくない、規模雄大である、錦繡の山大同の水、そこには行長と惟敬が折衝したと傳へられてる練光亭がある、日清戰役の大島旅團立見枝隊、さては左寶貴、原田重吉なんどの名が連想される、玄武門、七星門、萬壽臺、牡丹臺、乙密臺の勝あり、樹の間がくれのお牧の茶屋にとなりして浮碧樓のいらかは月光を浴び、碧流溶々綾羅島をめぐりて遊さん船は船橋里のあたりまでちらばつてる。

箕子四十一代、樂浪、高勾麗の昔より史蹟に富んだ柳京は、大同江流域の物資集散地として無煙炭の寶庫をひかへ經濟資源にも惠まれてる、豈たゞ妓生の本場たるのみならんや。

牡丹臺、乙密臺、玄武門

聞のよろしもその名のすべて
月いましのぼりたるらし浮碧樓の
いらかのなかばかゞやけり見ゆ

七十七、統軍亭

慶興から豆滿江をへだてゝ滿洲の一角をこえ、露領ボシエット一帶を見はるかす眺めもよいが、鴨綠江をへだてゝ虎山より九連城、沙河鎭一帶の丘陵起伏せるさまを展望する義州統軍亭の眺めもよい。

高麗と契丹隋唐の交より更に下りて日清、日露の戰役に至るまで、思ひ出の長い深い統軍亭は、五百年前世宗明王宣祖と兵を合はせ北の方女眞をうち、この地に凱旋し

て統軍亭に兩軍の留別式をあげたともいひ、爾來明韓兩國使節來往のとき、ここに送迎の禮を交へたともいふ、山縣元帥、黑木大將をはじめ日清日露の役に於ける我軍の將帥の扁額はところ狹きまで掲げられてある。

朝鮮には內地並に古社寺保存とか國寶指定とか史蹟名勝の保存とか、さうしたお觸れがでゝゐるかどうか知らない、もしなしとすれば統軍亭などは史蹟として保存の途は講じて置かなければならない。

統軍亭の一角に立てば水口鎭のあたり寸馬豆人の動くが見え、九里島に沿うて流す筏のつながりが霞む、李安訥詩あり。

宇宙百年人似蟻
山河萬里國如萍

筆者もつまらないが歌あり。

柳けむる島と島との中ぬうて
見えかくれゆく筏のつながり
三軍を吾ひきゐたる心地とな
統軍亭の高處に立てり

七十八、義州と安東

楚人冠

鴨綠江の水を隔てゝ新義州と安東とが相對してゐる。それは困るといつても今さら仕方がない。近年この河の上に壯大な鐵橋を架して、人馬の交通自由自在となつたが、それでは『朝鮮と支那の境の鴨綠江』である以上、義州と安東とは國が違つて何かと勝手が惡い、一寸橋を渡つて散步に出かけても一々稅關の檢査を受けなければならぬ、自動車で橋を渡らうとしても、どんな自動車も通行自由といふわけには行かない。

われら一行、下村、天野の外に私に京城から加はつた朝鮮郵船の重役吉村謙一郎どんを加へて、新義州に着くが早いか、直ぐ自動車を義州に走らせて、例の日清、日露

の兩役にわが軍の據つた統軍亭に登つて、鴨綠江を見下しながら、晝食の辨當を取つた。孤山前にそばだち、九連城が遠く江の右岸に見える。新義州はこちら、鳳凰城はあの方角としばらく指顧展望をほしいまゝにした後、こゝからプロペラ船に乘り移つて川を下る。それがそのまゝ安東側へ着けばよさゝうなものだが、それは支那政府の許さぬところとあつて、一旦新義州側へ着けて、こゝで別の發動機船に乘りかへて、改めて安東の方につけた。いくら安東に日本の專管居留地があり日本の商埠地があつて、事業らしい事業はことゞく日本人の手に成つてゐるにしても、依然として支那は支那だ。

安東に入つて、旗亭『すみれ』といふに入つて少憩の後市中を見物したり、ゴルフに興じたりして、夕方から歡迎の會に出るといふので、定めてこの『すみれ』に開かるゝことゝのみ油斷(?)してゐたら、いづくんぞ知らん、歡迎會は新義州の三橋亭にあるといふので、またあわてゝ朝鮮に逆もどりをする。新義州の催しだからといふので安東の人々はほとんど與かり知らない。

歡迎會が賑やかに終つて、いよ〳〵奉天行の夜行列車に乘らうとする段になると、新義州から乘りこんでは何かと不便といふので、またもや長い〳〵鴨綠江の橋を渡つて、中華民國安東縣安東停車場へ逆もどり。(七月五日)

第七編　朝鮮語問題

七十九、肥料と糟

外人の宣教師は本國からとりよせた金で學校、醫院を建てる、土地を求める、開墾をする、植林をする、經濟が大きくなり自立もするやうになり、よりて多くの土地の人はそれらの仕事のために生活の糧を得る、況んや無代とか實費で教化をうけ療養をうくる者においてをやである。

そこへくると日本の僧侶だちは本國から金をとりよせるどころか、鼻の下喰ふ殿建立のため、檀家の懐からなにがしかの寄進布施に有りつくより他事がない。

ある田舍では外人宣教師は轉任の折土地の老人だちに一圓づゝ喜捨していつた、貰つていつたのではない施していつたのだ。

外人の宣教師は肥料を施してる、日本の坊さんは糟をなめてる。

これは臺灣での話であつた。

朝鮮ではどうであらう!?

八十、教誨師身の上知らず

臺灣に赴任の當時臺北での話である。

名前もたしかに記憶に殘つてる、ケレメンテスといふスペインの宣教師があいさつに見えた、私はスペイン語も臺灣語も知りません、かく話すフランス語さへもあまりに貧弱で佛語うなことですといふと、ケレメンテスは私は臺灣語は職務柄相當話せますが、日本の領土である以上日本語も覺えませぬと不都合が多いので、不十分ですがいま日本語をけい古してゐますと、僕の佛語に愛想をつかしたか、自分の日本語の練習によい折と思うたか、ぽつ〳〵と日本語で話し出した。

外人は臺灣語のほかに日本語まではなす、これに反し新領土〳〵といふ口の下から、

その本國より乘り込んで來た坊さんはどうしたといふのだ、本島人を敎化すべく土語をけい古する代りに、極めて少數の內地人の法事に、なんの事か分らぬ御經の文句をうなつてるだけぢやないか。

刑務所へゆくと敎誨師で候といふ坊さんがをる、さなくとも御說敎は六つかしい、それを一々間ののびた通譯入りでなにが敎誨である、ちやんちやら笑はせるぢやないか。

これは臺灣での話であつた。

朝鮮ではどうであらう!?

八十一、支那語と朝鮮語

大連で滿鐵の有志の座談會に臨んだ時の話であつたと思ふ。

滿鐵の本社は採用せる社員には凡そ六ヶ月間支那語敎育を施すことになつてゐるが、事實支那にゐて支那語を知らなくては、日常の生活にも不便であり又社務の上に支障が多かつた、今は新入社員のみならず、在來の社員まで任意志願で練習を共にする者が少なくないといふ。

左もあらう、左もなければならぬ、時既に遲しといへども將來は恒久である、よいことをはじめたなと嬉しく聞いた。

ところで關東廳の中學校も支那語を敎程に加へた、これこそ御役所仕事としては一層嘆稱に價する次第であるが、學ぶ生徒よりも敎へる先生また子弟の父兄達にどうも難色があるといふ。

それはまたどうしたことかといへば、上級の學校に入るに支那語は不用であるからだといふ。

つまり實際を目的とする場合と、たゞ何々學校卒業といふ資格を目的とする場合とこれだけの相違がある、だから入社してまた六ヶ月練習といふやうな餘計な手數がか

かるのだ。

教育劃一主義その弊や拔くべからず、それにしても內地の御本家の教程がうんと改正せられねばならぬ、近ごろ中等教育調査會で外國語の時間を、第一學年の六時間、第二學年の七時間を各五時間に、三學年以上は選擇科目として二時間乃至五時間とし、更に英佛獨のほかに支那語を加へることになつてゐる。

少々眼がさめて來たらしい。

朝鮮の中學校の外國語はどうなるのか、朝鮮語はどうせねばならぬか。

日は三竿に上つてる。

八十二、支那語要不要

新領土で職を失ふものもものだが、それは適不適による優勝劣敗の理法によるものとしてしばらくこれをおき、問題とすべきは適不適のためよりも、昇進の順序として

の轉任である、その事例のもつとも極端なは外務と陸海軍である、いかに支那通であり支那語に熟達しても、外務省では支那語は特別任用の脇道を往來する階級の用語で、本街道は英佛語ときめてる、なにも日本國としての交渉が多くて重いとか少くて輕いとかいふのではない、英國や佛國はえらいからであること、なほ學校でも英獨佛語を敎へ込むに汲々として、支那語は全然眼中に置かざるに同じである、その人の身分年限の順序がくればくると語の上手下手もない、甲地から乙地へと順々に盥廻しにされる。

一體イタリー、ベルギー、トルコの大使やアルゼンチン、スペイン、ポーランドなどの公使とハルビン、奉天、天津、上海、廣東などの總領事とその職責いづれが重き！

いくら重くても今度は公使にしなければとか、やれ大使になる順序だらうなど、、例の盥廻しにかゝるからやりきれない、給料と官等と土地の格式とみな拔き差ならぬやう、井桁にはめ込んであるから自由な動きがとれない。

歐米の在外公館には陸海軍の大公使館附武官がゐる、土地の事情にも通じて來た、語も相當自由にはなせる、要處々々への顏なじみも出來てきた、恰度間に會ふやうになると旭川の聯隊長に轉任とある、關東州、臺灣などの軍司令部に在勤して一とかど支那通になつて來た、なつて來たころは豐橋の師團參謀に轉任とある。

凡ての將校をみな元帥大將にまで昇格さす意氣込みで、一度は聯隊長も一度は參謀もと、みな劃一主義の階段を丹念にまたげてゆかねばならぬ、その間に剔れた語が使へなくならうと、折角の支那通がその消息から中斷されやうと、そんな事は捨てとけほつとけである。

八十三、遠い親類近い他人

かうなると南滿鐵道會社位大きくなると、轉任してが同じく滿鐵の仕事である、ことに近ごろは入社する者には强制して支那語を教課する事になつた。關東州の學校でも支那語をはじめたといふ。

上海へは廻るひまがなかつた、東亞同文書院は故根津院長の指導の下にいくたの支那に專門の人才を輩出した、政治界にも經濟界にも言論界にもあらゆる方面に輩出した、ことに憂國の志士が少なからず此書院から輩出したことは尊い事實であつた、誰かは近ごろはさうした空氣が薄らいで來てるといふ、二十七八年、三十七八年の戰役といふやうな背景もなくなつた、時代の動きも爭はれぬ。

何事をおいても教育第一である、その根本方針の樹立である、昔から遠い親類よりも近い他人といふ、こゝに支那といふ近い親類がある、先づ內地の教育方針ことに對外國語方針から考へねばならぬ。

八十四、行き届いた教育

臺灣の蕃界で公學校を視察したとき、蕃童から倫敦や巴里の精しい說明を聞かされて、日本といふ國の教育の行屆きすぎてるのに感涙にむせんだ。

朝鮮でも教育はよう行屆いてる、中等教育になるとすでに日本語でかなりの負擔を背負はれてる生徒にまた〳〵英語を教へ込んでる、毎日必要な實用的な朝鮮語は御留守になつて卒業後英米へゆくでもなし、在鮮中英米人の通譯でもやるといふでもなし、またそれまでの力もつかないくせに、申譯ばかりの英語のため少なからず憂身をやつさねばならぬ事になつてる。

實用に遠ざかつてる語であるが英國といふ國はえらい國であるから、お前達は實用になる朝鮮語は學ばなくとも世間への體裁のため、英語は片言でもかぢつておきなさいと、無駄な金と時と手數をかけつゝある。

內地でもこの親切すぎた教育に反感と憤慨と、馬鹿らしさと阿呆らしさを感じてるたが、朝鮮の果てまでもちやんと劃一主義が行き屆いてる、豈それ有りがたがらがらざらんと欲するも得んやである。

八十五、朝鮮語練習

朝鮮語に親しむべしといふ私見に對しては、無論十中九まで贊成といふ書信に接してゐるが、中には反對といふほどでもないが、まあさうまでは〻と不贊成を匂はしたものもないではない、その理由は頗る簡單である、彼をして我國語を習熟せしむべし、何を苦しんで吾より彼を學ばんやといふのである、中には內地人が朝鮮語に力を入れだすと、朝鮮人は日本語習熟の必要が薄らいで來て、ために我國語の普及を害すといふのである。

一應は聞えてるやうでもある、かうした御都合主義の名論は、獨り朝鮮語に限らな

い、よく歐米に旅する者支那に旅する者などからも聞かされる、先方の語は知らなくてもよろしい、日本は世界の一等國だ、日本語で押し通すのみなどゝいふ、大層景氣の好い大氣焰である、尤もかうした手合は先方の語が出來た上にいふのでなくて、出來ないから痩我慢または氣休めにいふばかりで、土地の同胞に朝から晩まで厄介をかけること夥しく、それで事々物々白眼を以て批評し、得手勝手な熱を日本語で發散しホームシックを起して申わけばかりに赤毛布の駈足旅行をする連中に多い。

それとこれと一律にも論じがたいであらうが、兎に角不思議と日本人は語學の才がない下手である、下手だから外國語となると尻込して謙讓の德を守る、豈それ朝鮮語のみならんや、長年尊い時間と金と手數をかけて習ひ覺えさせられたはずの英語において又然りである。

八十六、日本語普及のため？

われらはなるべく朝鮮語を使はない、そして朝鮮全體から朝鮮語を無くし日本語のみにせねばならんといふのなら、その主張の是非は暫らく二段として、それは出來ない相談である。

どこにその民族がその土地に存してしかも國語のみ亡びたところがあらうか。

こゝに二、三の例をあげておく、白耳義瑞西はまづ我國の九州、朝鮮では咸鏡北道とその面積が相似てる位の小國である、その白耳義は千八百三十年ごろであつたと思ふ和蘭から分かれて獨立した、ところで佛國よりの土地であるから西部から中部へかけ佛語を話すが、リエーヂから東へかけては獨逸に境を接してるため獨語を話す、何よりも土地の人々は和蘭語に似たフラマン語なるものを話す。

白耳義の國語は佛語になつてゐる、しかし法規類でもみな佛とフラマンとならべて印刷されてある、町名の貼札も又然りである、われらの下宿屋のおかみさんはわれらに佛語をはなし、下女下男にはフラマン語を話す、佛語うな話だといふても事實であ

る仕方がない。

瑞西もアルプス連峰の南よりのカントンには一部伊太利語をはなす、西北の平野は獨逸に境せるカントンは獨語を話し、佛國に境せる方面は佛語を話す、ローザンヌからベルンにゆく時は平野をはしる鐵路から見ても、どこにカントンの境があるか分らない、それで一方は佛語をはなし一方は獨語を話してる。

語といふものは人間が定めたものであるから、活かしも殺しも出來さうなものだがさて中々容易に活かしも殺しもできない、そこで教育ある者はある一つの語にのみ囚はれない、瑞西の多くの人は佛獨兩語いな觀光客の關係から英語も話す、そこで在鮮の諸君にして將來日本語普及のため、不便を忍んでことさら朝鮮語を話しませんといふ人があれば、さうですかとその深謀遠慮に敬意を表したいがどうにも表されない。

八十七、愛蘭問題

日本と英吉利と似てる、朝鮮と愛蘭と似てるなどゝいふ人があるから、も一つ愛蘭の例を引證して見る。

序ながら一言いひ添へて置く、筆者はこの前の渡鮮の折であつたから、大正九年ごろでもあつたであらう、京城の客旅で總督府のさる友達と歡話を交へたときに、談たまたま愛蘭問題にふれると、いや朝鮮では愛蘭問題は禁物だよと手をふつた。

僕はその時に、それほど禁物がるやうなことをしてるのなら、根本から考へを建直さねばならない、四海比隣の世の中に屏風を立てゝも、戸をしめても、そんなことで朝鮮二千萬人の耳目が蔽へるものではない、われ等はむしろ、何故に愛蘭問題が起つたか、その原因を調べ、特に我國の爲政家の耳によく入れて置かねばならぬ、今日の狀態は英國にとりても、はた愛蘭にとりても、あゝかうなつてよかつた、と喜ばれてゐるのであらうか？　なるほど愛蘭は獨立の色によりて濃く彩られた、小さいなりに內閣も出來た、いろ〳〵の御役人の肩書もふえたであらう、しかし大英國から小愛蘭

になつた國民全體は果して幸であらうか。

昔は一朝鮮一日本の中にも群雄互に割據して干戈を交へてゐた、世の中が開けてくるほど次第に交通の發達は世界を狹く小さくする、あらゆる利害は複雜となり、次第に合同の機運が促進されてくる、民間の事業會社でも合同はあるが分立は殆どない。

世界の大戰は小國分立を來たしことは事實である、果して各國次第に分立してゆくのであらうか、それともこれは一時的の現象であらうか？

われらは過去の愛蘭から現在の愛蘭をしたしく十分に視察研究せねばならぬ、一等國の御成街道を觀覽氣分で旅行するばかりが能でもない、朝鮮、臺灣方面から旅する者は、特にバルチック海に沿ふ新興の小さな邦々や、舊墺國からバルカン方面の新興民族によりて建てられた國々を視察して、現在より將來を推度せねばならぬ、愛蘭問題を口にするは禁物ではない、內地人も朝鮮人も丹念に巨細によくしらべなければならぬはづだと反論した。

僕は昭和三年の今日も同じことをくりかへす、くりかへした上、語の上から又更に愛蘭を見ることにする。

八十八、愛蘭語

英吉利でウエールスは內地でいへば陸つづきだけに、先づ中國とでもいはうか、朝鮮でいへば西鮮一帶の地にも相比すべきか、その中國なり西鮮にあたる一角にウエルシュといふ土語が今猶殘存されてる事、なほ白耳義のフラマン語に異ならず、況んや九州とも見るべき愛蘭においてをやである。

愛蘭では大飢饉とか英本國の惡政により米國へ大移住したためでもあらう、愛蘭語は今のところで島民の三割位に用ゐられてるといふ。

そこで愛蘭は英帝國內の獨立自治國となる、その憲法第四條には

愛蘭自由國の國語は愛蘭語とす、但し英語は公用語として同等に認めらるべし。

とある、それは英語を止めたくも止められない、止めると何よりも不自由である、小學兒童が愛蘭語の練習に泣面してるばかりでない、愛蘭語は自島内の一部に限定された語である、もつとも接觸多き英本國さてはその植民地保護國、更に北米の各國から世界各國にある程度普及されてる英語を知らずにはすませられないからである。

回教の輸入と共にアラビア文字が國字となつてゐた土耳其では、國運の將來を達觀してムスタフア、ケマル大統領は、今やアラビア文字を廢して羅馬字國字を決議した。

八十九、融和問題と語

語が一朝一夕どころでない數十世紀を經ても容易に改廢できないといふことは、十二三萬人の臺灣の蕃族、文字のない蕃族の内にすら、山一つを隔てその族を異にする毎に未だに語を異にしてるのでわかる、同じ支那語といふても福建省の中には、十有餘の土語のなまりといはうか相違があつて互に意思は自由に通じない。

語は容易に動かない、しかし動く動かぬといふ事と、融和不融和といふ事とは別問題である、支那、朝鮮といはず歐洲各國でも、同じ語を使用する間ですらも絶えず戰爭がつづけられた、ある意味では世界の歴史は内亂の歴史であつた、同じ英語を使用する者の間にいろ〳〵の國も出來てゐる。

只語を共通にすることは便利である、幸福である、容易に意思を互に相解し合ふといふことは何より大事なこと必要なことである。

然るにその朝夕實際に必要な語を閑却するといふは何事か、そしてそれほど實用にもならない外國語に沒頭するのは何事か、問題は順序緩急にある。

九十、エスペラント

人間には語なくしては思想の交通ができない、語が分らなくてそこに何んの親しみ

があらう平和があらう、喧嘩する悪口する雑言する、だからいけないといへば唖でくらすより外はない。

一體エスペラントといふ世界語がどうして波蘭のザーメンホーフ博士によりて發明せらるゝに至つたか、その動機といへば博士の生ひ立つた部落ではポーランド人はもとより、ドイツ人がゐる、ユーゴスラヴィア人がゐる、猶太人がゐる、小さい村の中では年中喧嘩口論が絶えない、その紛擾のもとはといへば、言語が十分に通じない事が原因になつてる、そこでもし各人相互の思想が容易に自由に通じたならば、世界の各國相互の間も定めし平和となるであらう、これが眼科醫のザーメンホーフをして博言學に志し、各國の言語の長處を取つてもつとも學び易い世界語をつくり、これに希望（エスペラント）の名をつけた所以である。

語が通じなくてどうするのだ！

九十一、鮮人か朝鮮人か

朝鮮人は鮮人といはれるのはいやだといふ、我社内の通信會議でも鮮人といふ語はさけてほしいといふ提案があり、大分前からわざ〳〵略字をする世の中に、朝鮮人と御ていねいに長たらしく記してる、この調子で一々中華民國人などゝ書き立てゝゐたら、中々手數な事であるとおもふ。

しかしその鮮人とか朝鮮人とか、使ひ分けを注意せねばならぬといふのも、畢竟は朝鮮人の方で語を聞き分けるからである、それで問題になるのである。

反對に朝鮮人側では内地人をなんといふてるか、警官などはタクムナアリ、酷い旦那様といはれたり、巡査は豚といはれたり、憲兵は牛といはれたり、内地人は下駄ナムクシンといはれたりしてるさうではないか。

内地人の様々方は眼の前で大口きいて悪口をいはれても、知らぬが佛で平氣な顔して納まつてゐる、そして自分達はやれ鮮人といふがよいの悪いのと氣にしてる。

九十二、御健康を！

臺北ではしば〳〵支那の御客を接待した、支那側の人は多くは日本語をはなす、偶話せない人であつても杯を擧げて「御健康を」位のことはいふ。

比律賓や蘭領印度、印度支那、海峽植民地邊から朝鮮文武の人々が見える、無論日本語は話せない、それでも「御健康を」とか、「萬歲」とか、「お早う」とか、「今日は」とかいろ〳〵の片言を覺えて御愛嬌をふりまく、別れにはきまつたやうに「左樣なら」を連發して握手する、之を耳にする吾等は決して惡い氣はしない、いや嬉しい、吾身つねつて人の痛さを知れで、我身嬉しければ人も亦嬉しい。

少しは御互に嬉しがつたりがられたりしやうぢやないか!?

九十三、諸鹿央雄、國本綱一

慶州佛國寺から石窟庵の登山にも、諸鹿央雄君は朝鮮人それも同行の人はもとより途すがら行きかふ人々と馴々しく話をする、それがいかにも手に入つてると見えて、どの朝鮮人も朝鮮人もいかにも嬉しさうに愉快さうに笑ふ。

金剛山で萬物相の一日九龍淵の一日、溫井里警察分署の國本綱一君が東道の勞をとつてくれたが、六月の炎天に岩角を登り降りにも、降りしきる雨にぬれそぼつ突こつたる谷間の細道傳ひにも、詞が旨いといふほかにその話し方がいかにも堂に入つてる、その心持がいかにも打ちとけてると見えて、駕籠かきの人夫ども汗をふき〳〵あえぎあえぎ、ゲラ〳〵と笑ひどよもしてる、一向に朝鮮語に不調法な自分は片言交りなりと口拍子を合したら、どんなにこの人達と氣を許し合ひ、なつかしく打ちとけられることであらうかとおもふた。

面白く表現する才と暖かい氣分それがなにより望ましい。

九十四、悲劇（加藤灌覺）

筆者の朝鮮における僅かな實驗談で足りなければ臺灣の思ひ出がまだいくらもある、がそれも樂屋落ちの嫌ひあるといふなら、最近京城雜筆の十一月號であつたか、三木一彦君の世間ばなしの一節に次の如き記事が見えてゐる。

總督府の加藤灌覺氏の朝鮮語のウマイのは有名な話だが、城大の秋葉教授などは、『もう加藤さんと旅をするのは懲り〳〵だ』というてゐる。

どういふわけかと、訊いて見ると、加藤さん會話が上手で、巧に所用を果すばかりでない、よく朝鮮人の一人々々の心を摑んで話をするので、相手から非常に敬慕される。

この間も、御兩所同伴で、江陵（江原道）に行き、四、五日滯在中、あちらの有志家と、すつかり懇意になつた、そして戻る時は大勢の人が、四五里もある港まで送つて來る、いざ出帆となると『先生、お名殘り惜うございます』といふので、堂々たる鬚髯公が、めい〳〵手放しで嗚咽泣號する、こつちもつひ貰ひ泣きといふわけで、加藤氏と行くと、しまひはどうしても、悲劇一幕……といふことになる。

九十五、窪田誠惠

今一つは窪田誠惠氏の話である。平安南道で市場稅の紛爭から內地人が全部殺された中に、たゞ一人何等危害をうけなかつたのが窪田氏であつた。なんでも明治三十七年二十七八歳の頃であつたらしい。渡鮮して平安順川郡新倉の山奧で、私費を投じて學校を興し一意專心鮮人教育に盡瘁すること實に二十年、隣保皆君を神の如く敬ひ懷きて、かの萬歳騷動の時も君に危害を加へるどころか、君の邸に相集まりてその訓諭をうけたと傳へられてる。君は獨身で養女に鮮人を配し、近時間島に入りて鮮人教育をつゞけてゐるとの事である。

誠！　それが最初の道であり又最後の道である。なにもこゝに鮮人問題をかつぎ出

すばかりではない。どうも近頃政治にも肝心の誠が缺如してるやうな氣がしてならぬ。今關門を後にするに當り、内を省みても外に向つても、只至誠こふ二字が思ひうかぶ。只至誠といふ二字のみが……　（三、五、三一、山陽ホテルにて）

九十六、獨佛共學

むすぼゝれ解けえざる國の中縫うて
千里ラインの水ながれゆく

これは筆者が大正十一年の春ライン河を横ぎる時の詠草である。

その獨佛兩國ではこの九月のことであつた、新しい試みとして各三百づゝの小學校の兒童を交換してみた、佛國の兒童はベルリンにおいてドイツ人の家族と同樣に、又ドイツの小學校兒童はパリにおいて佛國人の家族と同樣に、各一ヶ月間を送つたのである、その大部分はほんの少しの佛語なり獨語なりを覺えたに過ぎないが、この交換はフアミリー・ロカルノと稱せられて非常な好成績ををさめ、兩國の親善關係について將來多大の效果をもたらすものと各方面から注目せられてゐる。

これは獨佛兩國の間の話である、前世いかなる因緣か、ラインの川をさしはさみ絶えずにらみ合つて來た、たえず干戈を交へて來た獨佛二國の間の話である、われらは今少し懷を大にし、より高處に立ちて遠く廣く達觀しなければならぬ。

こゝにおいて共學あり共婚あり。

九十七、詞の交換血の交換

詞の交換！　血の交換！　なにも無理にせよといはない、そこに打算があつてはならぬ、しかし人情には國境がない、戀には上下もない左右もない。

内鮮間の緣組も

大正十二年　二四五　　大正十三年　三六〇　　大正十四年　四〇四

昭和　元年　四五九　　昭和　二年　四九九

とあり、内地人の朝鮮婦人を娶りし者二四五朝鮮人の内地婦人を娶りし者二三八で、大體相半してる、これを年次別にして次第に增してくるは當然すぎる次第であるが、それにしてもあまりに少なすぎる、しかもその多くは必ずや所謂第三階級に屬する者であらうとおもふ。

今日は茨木のゴルフリンクへ芳澤公使を案内したところ、そこに篠田治策君が見えてる、ややと聲高に話しあうてると、あとから李王殿下と妃殿下がクラブを手にして見えられた、朝露にしめつた青毛せんを敷きつめたやうなフエヤー・ウエイを、しめやかに語り合ひつゝ、アフター・ナインにむけ足を運ばれてゆく。

そこに小春日和の靜けき天地がある。（十一、十三）

第八編　移民問題

九十八、朝鮮人の内地移入

勞働者の渡日

昨年震災に一時歸國したる數正確には不明なるも約六萬を超ゆべしと、彼等は一時危險を恐れて歸來せるも、幾許ならざる今日に於て、彼等は反て踏み止まらざりしを後悔するに至れり。彼等他國に流離するは自ら好む所にあらず、生活日に困難を加へ、職業益求めがたく、彼等日本にゆけるに非らずして環境彼等を日本に逐ひしものなり。

これは當時「東亞」にのせられてある記事の一片である。

今回釜山市民大會は次の如き決議をした、曰く人道正義と共存共榮の目的により、朝鮮人勞働者の日本渡航を開放し。現在釜山に集合してゐる勞働者四千餘名を、一

週間以内に凡て渡航せしむべく總督府當局に要求す。

嗚呼誰か懐しき故郷を離れ温かき父母妻子と別れて、土地不馴の他郷に赴き異民族の奴隷となるを喜ぶであらうか、あらゆる壓迫を受けて來た吾人は、今や稼ぐべき仕事までもなくなり全く餓死すべき窮境に陷り、無言の中に自己の家より放逐されるのである。

これは大正十三年開闢の七月號にのせられてある文句である。

故意に挑撥的に書立てたといへばそれまでゝあるが、もし本氣でさう思うてるとすれば頭から誤つてる。

朝鮮人の内地に流れるのを、働くべき仕事はなく餓死すべき狀況にありとし、恰も現在山東の民の滿洲に流れるのと同一に見るとすれば、それは明かに繼子根性の見方である。

九十九、山東移民

山東の民で滿洲に出稼ぎする者毎年平均五十萬人、それが昨年から百萬人を突破するやうになつた。

その理由の一は張宗昌の軍と國民軍の間に兵禍絶ゆる時なく、山東軍は二十餘萬の大軍を支持するため、課金はもとより牛馬農産物の徵發を强制し、地租は民國二十年までの分の前納を命ぜるあり、人民の負擔は例年の十倍するに至つたのである。

その理由の二は内亂の連續により、地方官憲の警備ゆるみて土匪到る處に横行し、一村あげて掠奪凌辱慘殺に委せられしところすらあり、人民あげて身體財産の安寧を保つあたはざる狀態に陷つてる。

その理由の三は連年の水害旱魃のため西南地方は落花生、棉花、高粱等すべて全滅に近く、食糧および燃料の缺乏に苦しんでゐる。

その理由の四は銅貨の下落であつて、大正十一年ごろは大洋一弗に對し銅貨百六十

枚内外であつたのが二百七十枚となつて來た、これだけに銅貨の支給をうける勞銀生活の者は非常な苦痛に陷つてゐる。

李朝の下にはかなり惡政の禍虎よりも恐るべきものありしを聞かぬではないが、朝鮮の現狀において右に記せしやうな慘狀は事實として認めることができない。

百、支那人進出

人間至るところ青山ありで、未開の地にも不順のところにも出かけないではない、歐米人が南洋や南米や中央亞細亞、阿弗利加方面に發展するのがそれである、日本人の伯西行などもその消息を語つてゐる。

しかし大體において水は低きについて流れ、人間は暮しよい方へ流れる、暮しよいとは職が得易い、收入が多いといふことである。

東洋の黃色人種は北米や濠洲邊から移住の排斥を喰はされてる、東洋の天地必ずしも住心地あしきにあらず、米濠の文化生活がより進んでる、物價も高い、それだけ收入も多いからである。

朝鮮人が間島から滿洲一帶の人口疎なるところに、開墾といふ立場で農的方面より進出すれば、支那人は雜貨店、料理店なんどの商店方面よりかなり朝鮮に入り込んで來てる。

支那勞働者の移入は內地のそれの如く、朝鮮でもかなり嚴重に制限されてる、それでもどし〳〵は入つてくる、必ずしも本國の惡政がどうの朝鮮の善政がどうのといふにあらず、朝鮮は支那より物價が高い、なほ日本人の北米出稼をもくろむと相同じ、論より證據新義州と安東とは一葦帶水をへだてゝゐるが、そこに物價の開きのいかに大なるか、それがいかに響いてゐるかを如實に語つてゐるではないか。

百一、日本、朝鮮、支那